



子育て応援BOOK
「はじめの一っぽ」 Vol.2

～ 福岡発！地域でつくる
子どもの遊び場＆プレーパーク編 ～



福岡県立社会教育総合センター

子育て応援BOOK冊子づくり委員会

●はじめに

はじめに

平成 16 年に、福岡県社会教育委員の会は「子どもの体験活動の充実方策について～体験活動の質と量の高まりを目指して～」を提言しましたが、その中で期待される 5 つの体験活動の一つとして「遊び体験活動」をあげ、「子どもの遊びは楽しさを与えてくれると同時に、社会性、協調性、人間関係能力、体力、耐性、創造性、思いやりの心をはぐくむ」と述べています。しかしながら福岡県青少年アンビシャス運動推進室の「子どもの遊び実態調査（平成 14 年）」では、現在の子どもの遊びが、テレビやゲーム等の室内遊び、個人遊びが中心で、屋外での集団遊びが少なくなっているなど、子どもたちの良好な人間関係づくりや心の健康の面で、必ずしも望ましいものではないことを明らかにしています。

福岡県立社会教育総合センターは少年自然の家を併設し、「県民の学習活動支援」「子どもの育成支援」「社会教育関係者等の養成支援」の三つの機能を持つ教育施設ですが、「子育てネットワーク in ふくおか」や子育て支援WEBサイト「ふくおか子育てパーク」などの事業展開の中で、パワー溢れる多くの親御さんたちにご利用いただいています。その交流の中から平成 17 年に、親たちによる子育て応援冊子「子育てグループ活動応援BOOK～はじめのいっぽ」が生まれ、今回その第 2 弾として「子育て応援BOOK『はじめのいっぽ』Vol. 2～福岡発！地域でつくる子どもの遊び場＆プレーパーク編～」が作られました。前回同様、当センター内に設置しています「ふくおかボランティア活動支援事業実行委員会」が福岡県教育文化奨学財団の支援を受け、本冊子が作られたことを感謝申し上げる次第です。

今回の冊子は、子どもたちの好奇心や欲求を大切に、身近なところで遊びの魅力を感じられる遊び場を作りたいとの思いを大切に、前回同様親たちが中心となって実践に取り組みながら作りました。「子どもは土と水と風にさらされて育つ」と申しますが、今回の冊子を契機に、自発的な子どもの遊び体験が広がることを期待いたします。

最後に、県内のプレーパーク（冒険遊び場）関係者やさまざまな団体の方々にご協力いただき本冊子が作られましたことを感謝申し上げますとともに、公私ともにご多忙ななか、実践しながら本冊子をまとめられた子育て応援BOOK冊子づくり委員の皆様に心から敬意と感謝を申し上げます。

平成 18 年 10 月

ふくおかボランティア活動支援事業実行委員会委員長
福岡県立社会教育総合センター所長

菊川律子

●もくじ

●はじめに.....	1
1 子どもが活き活き遊ぶ環境を目指して.....	3
1-1 地域子育てからはじまる親子の「はじめのいっぽ」.....	4
1-2 遊び場での大人と子どもの関わり方.....	7
■ ギモン解決！プレーパークってなに？	9
2 福岡における多様な子どもの遊び場事例	
～こんなところでもあんなところでもできるんだ～.....	11
2-1 おうちでプレーパーク ～子どもにとっていちばん身近な遊び場～.....	12
2-2 公民館でプレーパーク ～子ども体験事業としての展開～.....	15
2-3 箱崎商店街「きんしゃいきやんぱす」	
～日常的な子どもの遊び場・立ち寄り場～.....	20
2-4 北九州市立大学 ミニ・プレーパーク ～大学と市民のコラボレーション～	23
2-5 九大探検！ ～大学だって遊び場に！！～	29
2-6 前原のプレーパーク ～“やおおいかん”を楽しんで！	
子どもも大人も思いっきり遊びたい～	34
2-7 城南区プレーパーク ～土、水、木、火… 自然の中で思いっきり～	39
2-8 わくわくプレーパーク ～子どもと大人の冒険遊び場～	43
2-9 公園プレーパーク ～いつもと違ういつもの公園～	47
2-10 大野城プレーパーク ～常設の夢をめざして～	50
3 はじめてみよう！プレーパーク ～土・水・木・火を使ったメニュー編～	53
プレーパーク はじめのいっぽ ～まずは外に出てみよう～	54
4 座談会 子どもにとっての「遊び」とは？ ～求められる「遊び場」を考える～	59
5 自然と人との関係がつくる子どもが遊ぶ環境 ～まとめにかえて～	75
5-1 自然と人の関係.....	76
5-2 五感を使った子どもの遊び.....	77
付録 プレーパークお役立ち資料集.....	78
● 子育て応援BOOK冊子づくり委員会メンバー紹介	81

1

子どもが活き活き遊ぶ環境を目指して



地域子育てからはじまる親子の 「はじめのいっぽ」

● 親の出会いと学びを支える地域の仕組み

2005年に発行した冊子「子育てグループ活動応援BOOK～福岡発！地域子育て～『はじめのいっぽ』」では、今どきの子育て事情から子育ての課題をとらえ、子育てグループ活動の意義や必要性をまとめました。そして、県内各地の42の多様な子育てグループ活動事例を紹介するとともに、その活動の支援のあり方を提案してきました。

冊子づくりでの成果は、子育て中の親子にとって、地域でともに育つ仕組みとしての子育てグループ活動が大変意味のある場であるということと、これらの子育てグループ活動の存在をたくさんの方に知っていただけたことだと考えます。

もちろん、そこに参加しない親、またできない親もいるわけですから、子育てグループさえあればいい子育てができるというわけではありません。しかし、初めて「子どもを産み育てる」という営みを経験する親たちにとっては、子育てグループの活動に参加することによって、そこが子育てモデルに出会える場、親子にとって居心地のいい場となり、いいことも悪いこともホンネが言い合える仲間との出会いの場という、地域子育ての重要な土台づくりとなっていることは確かなようです。

子育てグループ活動に参加し受容され共感された親たちは、豊かな人間関係の中で次第に明るさや自信を回復している様子が見受けられます。最初は、活動の一参加者であった人が、わが子の成長とともに関係や経験を積み重ねていき、新たに子育てを始めた親たちへ、支え合いの関係を広げるという「やさしさの連鎖」の仕組みも生み出しています。さらには、よりよい子育てを目指して活動を始めた親たちが、子どもに関する活動、環境、食、生活、人権問題、まちづくりなど、自身の興味関心から広がる生涯学習の「はじめのいっぽ」に活動を展開している様子もあります。

● 子育てグループ活動から「子どもの遊び場づくり」へ

子育てグループ活動に参加した親たちは、自分の居場所を見つけていく中で、孤立の子育てから、共感、共有、受容の関係の中で、親子イベント、そして子育てに関する学習に取り組み、次第に子育ての悩みを解決したり、自信を回復していきつつあります。そして、子育てや子どもに関する学習をおこなっていく中で、今の子どもたちの「遊ばない状況、遊べない状況」ひいては、「友だちが出来にくい」「メディアが蔓延している子どもの環境」を目の当たりにし、子どもの生活を支える大人として何をすべきかを考えていく人たちがあらわれてきました。それら「子どもの遊び」に関心をもった親たちが中心になって、「子どもが生き生きと遊ぶ場をつくりたい！」という思いをかたちにした「子どもの遊び場づくり」が、現在県内のいくつかの地域で試みられるようになってきました。

● 「はじめのいっぽ Vol.2～子どもの遊び場＆プレーパーク編～」 ができるまで

子どもの生活破壊が叫ばれる現在、その子どもの生活の柱の一つである「遊び」について、いろいろな取り組みがなされています。「子どもの遊び」といっても、乳幼児期から思春期という子どもの年齢によって、その時期その時期の意味や内容があります。また「遊ぶ場所」を考えても、家の中から地域や学校などその子の成長に応じた生活圏の広がりによって変わってきます。しかし近年では、「遊び」そのものの選択肢が減少し、内容や場所についてもまだ十分とはいえない状況から、中でも外でも遊ばない子どもに対する悩みを抱える親が多く見受けられるようになってきました。それらの状況から「子どもの外遊び」を支えるための、「子どもの遊び場づくり」を考えいく必要が出てきています。

福岡の子育てグループ活動の展開の一つから、このような思いを持った親たちによって「子どもの遊び場づくり」の取り組みが始まっています。本冊子「はじめのいっぽ Vol. 2」では、さらに子どもの遊びを豊かにするために、野外における子どもの遊び場づくりを取り上げ、まとめていくことにしました。

半年間に渡っておこなわれてきた編集委員会は、プレーリーダーとして活動されている人、子どもの遊び場活動を現在行っている人、またこれから活動をやってみたいという人、また関心はあるけれどやり方がわからない人、社会教育に携わる行政職員など、総勢 10 名の委員によって構成され、子どもの遊びについて話し合ったり、活動に参加しながら、取材や執筆をすすめました。

この冊子をつくるにあたって編集委員会で大切にしたことは、多くの人に「子どもの遊びって大切なんだあ。」「ここでもあそこでも、遊び場ってできるんだあ！」と実感してもらえるような冊子を目指したいということでした。そして、読み終わった時に、「自分も子どもの遊び場をやってみようか」という「はじめのいっぽ」を踏み出すきっかけになればと思います。一人一人が始める小さな取り組みによって、子どもたちの遊び環境を豊かにする一助が担えればと思います。

● 「子どもの遊び場って何？」を考える内容づくり～冊子の概要～

■ 1章：子どもが生き生き遊ぶ環境を目指して

最初は、この冊子の前身である「はじめのいっぽ Vol. 1」の内容についてふりかえりをおこない、子育てグループ活動から生まれた一実践分野としての「子どもの遊び場」への展開の説明をしています。次に冊子の概要を述べ、最後には、「子どもの遊び場」実践で、特に大切だと思われる子どもに対する大人の関わり方について、実践の中から見えてきたところを中心に述べています。

■ 2章：福岡における多様な子どもの遊び場事例

福岡における多様な子どもの遊び場事例として、7 分野 10 事例を取り上げています。
①子どもにとって一番身近な遊び場である「おうちでプレーパーク」、②子どもの体験事業につなげる「公民館でのプレーパーク」、③地域の人とふれあえる「商店街での遊び場づくり」、④大学を遊び場として開放した「大学敷地内のプレーパーク」と「大学探検」、⑤定期的な活動実践を展開している「前原（前原市）」「城南（福岡市城南区）」「福津（福津市）」の市民活動としての取り組み、⑥規制のある公園でどこまでできる

か挑んだ「公園プレーパーク」、⑦市の常設を目指した「大野城」の取り組みです。

この10事例は、あえてどこの地域にも存在するような、身近な場での実践から、公共的な場（常設）を目指した活動、また規制や悪条件の中での可能な活動など、さまざまな規模や環境の異なる実践を取り上げてみました。その中で一つでも「これだったら、やってみようかな」と思う活動やそのヒントにして頂ければいいなあと思っています。また、商店街や大学を取り上げていくことによって、これまでの社会教育活動の場や活動のあり方にも広がりをもたらされるのではないかと思います。

■3章：子どもの遊び場づくり「はじめのいっぽ」～まずは外に出てみよう～

事例紹介を読んで「今すぐ、はじめたいなあ」と思われた方、まずは肩の力を抜いて「おうちでプレーパーク」はいかがでしょう！この章では気軽にできる外遊びメニューを紹介しています。実際に子どもの遊び場としてのプレーパークをやっている実践者が執筆しているので、即実践で使える身近な素材や材料を取り上げ、その使い方や準備について解説しています。使える予算や場の環境など制限はつきものですが、その範囲内で知恵と工夫をこらしてつくっていくところに、愛情いっぱいの手作りの良さがにじみ出ていると思います。子どもが主体的に遊ぶ場は、下準備や環境整備など大人の覚悟と頑張りという下地があってこそ生まれるものだと思います。

■4章：子どもの遊びについて熱く語り合った「座談会」

ここでは、「子どもにとっての『遊び』って何？」をテーマに、3人の登壇者と司会者の4人で座談会を企画しました。子どもの発達段階に応じた「遊び」の意味をはじめ、場の作り方や関わる大人の意識にいたるまで、実践活動をしているからこそ見えてくる子どもの遊びについて熱く語り合っています。ここでは、子どもの発達における、外遊びやドキドキワクワクする冒険遊びが、子どもの心身の成長においてどのような影響をもたらしているのかが、実際の子どもの姿を通して理解することができます。また、登壇者の最後の言葉にもあるように、「遊び心」を持ち、「人とのつながり」を大切にし、「安全」に遊べる場の必要性とともに、子どもの遊び場を地域でどのようにつくっていったらよいのかという課題についても検討していただいている。2章で紹介する実践事例をもとに、いろいろな地域で「子どもの遊び場」実践が始まることを期待しているところです。

■5章：自然と人との関係がつくる子どもが遊ぶ環境

最後は、冊子づくり全体を通して、子どもが遊ぶ環境のまとめを書いています。子どもの遊びをつくる環境には、場所や資源というハード面だけではなく、大人の関わりや子どもに関わる目線などソフト面が大きく作用していることを、再確認しています。また付録として、「お役立ち資料集」の欄も設けました。さらに詳しく子どもの遊びについて、学びたい、知りたいという方は、ぜひご活用下さい。

以上の内容から、子どもや遊びについての理解を深めていきます。

次節では、子どもの遊び場での大人の関わりについて考えていきたいと思います。



遊び場での大人と子どもの関わり方

● 素朴なギモン

子どもの遊びの場では、大人はどのように子どもと関わったらいいんだろう・・・。そんな素朴なギモンが、私にはいつも付きまといます。プレーパークにしてもそうです。プレーパークにいる大人はプレーリーダーだけではなく、いろいろな大人がいます。いろいろな大人が、それぞれの立場、それぞれの役割で、子どもと関わっています。そんな大人は、子どもとどのように関わればいいのでしょうか。ここでは、子どもの遊び場での大人と子どもの関わり方について、「私」のケースを元に、少し考えを巡らせてみたいと思います。



● 「私」の体験から

私が大学生だった頃、自閉症という障がいを持った子どもたちと遊ぶという経験を4年間積んできました。自閉症は、その名前から「自分の殻に閉じこもっている」という誤解を受けやすいのですが、決してそうではありません（脳の機能障がいと考えられています）。むしろ、彼らと関わる中で私が気づいたのは、私の方が自分の殻に閉じこもっていた、ということです。彼らと遊ぼうと思ったとき、いつも私の手にはボールやフラフープがありました。すぐに道具に頼り、彼らがそれで遊び始めるのを待つだけでした。しかし、そうじゃない！ということを彼らは教えてくれました。思い切って一緒に遊びきったときの、あの感覚。心が通じ合う、あの感覚。彼の目も、そしてきっと私の目も活き活きしていたに違いありません。子どもたちを「遊ばせる」のではなく、一緒になって「遊ぶ」、その姿勢が、私にとって一番重要なことでした。

その後、私は子どもの遊び場「きんしやいきやんぱす」を始めました。子どもたちと思いつきり遊ぶこと、その姿勢を大切にしながら、毎日を過ごしています。その中で、子どもの目線を大切にすることも欠かせないということに気づきました。「遊び道具」として整備されたものだけが遊び道具ではなくて、例えばそこに水溜りがあるだけでそこは豊かな遊び場になります。そのような子どもの目線を見逃さず、一緒になって水溜りで遊んでしまう。そうすると、遊びはさらに発展するし、その場が活き活きとしてくるのです。子どもとの関係も深まります。また、大人は将来の見通しが立つだけに、「将来、子どもにとって役に立つこと」を考えてしまいがちです。もちろんそれも重要です。でもそれ以上に、「今、子どもがしたいこと」を尊重したいと思う



ようになりました。それは、今、その瞬間の、子どもの可能性を大切にしたいという思いからです。

一方で、子どもに重大な危険が及びそうなときに、そっと手を差し伸べることも必要です。また、子どもが大人の都合で追いやられるとき（例えば「遊び場がなくなる」など）には、子どもたちの代弁者となる必要もあると思います。時には叱ることも必要です。まだ学生の私には最初は非常に難しかったです。今ももちろん難しいです。でも、一般論で叱る（「いじめはダメ」）のではなく、自分の感情を示すかたちで叱る（「私がそうされたら私はすごく嫌だ」）という自分の叱り方が確立されてきました。そしてそれは、子どもと関係ができてきているからこそ、届いているという感覚でいます。このように、いざというときに、「大人」として関わるべきときがあるということもわかつてきました。

ざつと「私」の体験を振り返ると、子どもへの関わり方に関して、以下の3つのポイントが見えてきました。

- ① 「（大人も子どもも関係なく）大人も思いきって遊ぶこと」
- ② 「子どもの目線を見逃さず、大切にすること」
- ③ 「（大人だからこそ）大人として関わるべきときがあること」

これらが、最初の「素朴なギモン」への自分なりの答えです。これまでの浅く短い私の経験から、このような子どもへの関わり方・向き合い方を、自分なりの答えとして見出したつもりです。しかし、もちろんこれが最終的な答えではありません。これからも、子どもと関わっていく中で、常に問い合わせながら生きていくのだと思っています。



● 大人と子どもの関わり方の「答え」

最初の「素朴なギモン」の答えに関して、極端に言うと、子どもとの関わり方に普遍的な正解はないと思います。それぞれの人が、目の前にいる子どもと真剣に向かい、ときに子どもと一緒に遊んでみたり、考えてみたりする中で、その人のその人なりのスタンスが確立されてくるのではないかと思います。そしてそれが、その人にとっての答えなのではないかと思っています。

この冊子の事例からは、プレーリーダーのような専門家に限らず、さまざまな大人のさまざまな関わりが垣間見えるはずです。自宅を開放している親もいれば、商店街で関わる学生もいます。大学に乗り込んでいく大人もいれば、公園に遊びを仕掛けちゃう大人もいます。そして、自分たちでプレーパークという場を作り出そうという大人たちもいます。このバリエーションに富んだ事例からは、その場その場の大人の関わり方が見えてくるはず。そこがこの冊子の魅力です。また、この冊子を通して、読者のみなさんそれぞれの子どもとの関わり方、向き合い方をふりかえるきっかけになれば幸いです。



ギモン解決！プレーパークってなに？

～福岡プレーパークの会・プレーリーダー

古賀彩子さんに聞きました～

◎ 事例紹介に入る前に・・・

「プレーパークって聞いたことないなあ」「プレーリーダーって誰のこと？」
そんな疑問が浮かんだあなたに！ ぜひご一読ください。

■ プレーパークってなに？？

子どもたちが育つ過程には、人との関わりや自然とのふれあいなどさまざまな体験が必要です。子どもたちは主体的に遊ぶ中で多様な体験を積み、創造性を養います。「遊び」は、生きるための原動力として欠かせないものです。しかし、現在子どもたちを取り巻く環境は激変し、その影響は子どもたちの「遊び」を直撃しています。遊び場がない、時間がない、遊ぼうと思える余裕がない等、特に都市部の「子どもの外遊び」に関しては深刻な状況です。公園や学校の校庭では、さまざまな禁止事項が定められ、テレビゲームの普及が子どもたちを外（自然）での群れ遊びから遠ざけ、同時に遊べる空間が減りました。そして、人と人とのつながりも薄れ、地域でさまざまな人間と関わりながら成長する機会が減りました。結果として、規制され与えられることに慣れた子どもたちが、自らが考えて決める体験が少ないまま大人になっていきます。

プレーパーク（冒険遊び場）は、子どもが自ら遊びを作る遊び場です。子どもがのびのびと思いきり遊べるように禁止事項をなくし、「自分の責任で自由に遊ぶ」ことを大切にしながら、そこにある道具や自然の素材や廃材などさまざまなものを使いながら、自分のしたいことを実現していく遊び場です。そこでは、火を使ったり、地面に穴を掘ったり、木に登ったり、何かものを作ったり・・・いろいろな遊びが展開され生まれていくので「変化し続ける遊び場」とも言えます。「遊ばせてあげる」のではなく、子どもたちが本当にやりたいことをやりたいように遊べる場所、それがプレーパークです。今や、すっかり失われてしまった子どもたちが自由に遊べる環境を子どもたちに返していく活動をプレーパーク（冒険遊び場）活動と呼んでいます。

このようなプレーパーク活動は、これまで地域において子どもたちが活き活きと遊べる場所を生み出そうとする市民活動として広がってきました。日本で初めての常設冒険遊び場「羽根木プレーパーク」は、今年25周年を迎え、現在、そのような活動は全国で200以上を数えるまで広がりを見せています。行政機関の中でもプレーパークに対する関心が高まってきています。厚生労働省は次世代育成対策推進法における先進的取り組み事業として、東京世田谷区のプレーパーク事業を取り上げています。



■ プレーリーダーってなに??

もう一つ重要なポイントは「プレーリーダー」の存在です。プレーパーク活動において、子どもたちの遊びの空間（環境）を作り出していくのは大変重要なことですが、そこで子どもたちが自ら遊びを生み出していくような、かつての群れ遊びを取り戻せるかというと、なかなか難しいのが現状です。核家族のため、群れて遊びを生み出すことに慣れていない子どもたちに対し、その場で「ガキ大将」として子どもと同じ目線で遊びを導いていく大人、それが「プレーリーダー」です。日本ではまだなじみのない資格ですが、イギリスでは「プレーワーカー」、ドイツでは「ペタゴー」と呼ばれ、広い意味での社会教育の一端を担うものとして、遊びの先進国ではひとつの職業として確固たる地位を得ているのです。「プレーリーダー」は、その“リーダー”という言葉から遊びの指導者と思われがちですが、決してそうではありません。プレーパーク活動の主旨からもはっきりしていることは、プレーパークはあくまでも子どもの主体性に基づいた場所であり、プレーリーダーは、遊びを「指導する人」ではなく「子どもが自ら遊んでみたいなあ」という気持ちにさせる人のことです。2002年2月に開かれた「第1回全国プレーリーダー遊学祭」で採択されたプレーリーダー宣言は次の5項目で構成されています。

- 一、 子どもが主役の遊び場をつくる
- 一、 子どものありのままを受け止める
- 一、 子どもと人として対等な関係を築く
- 一、 遊びから見える子どもの姿を発信し続ける
- 一、 子どもの遊びを重視できる社会へと意識の転換を図る

この宣言を見ても明らかのように、プレーリーダーはプレーパークに関わるさまざまなことを担っています。子どもの興味や関心を引き出すような場の整備に始まり、子どもと一緒に思い切り遊び、子どもの信頼を受ける存在でもあります。時には子どもの相談役になり、常に変化する遊び場の状況に応じて注意を払い、子どもに声をかけます。ケガや思わずトラブルに対しても対応できることが求められます。遊びを規制しようとする大人たちに対して、子どもたちの代弁者としてメッセージを発信し、幅広く地域とのつながりを持ち、日々の子どもの遊びと成長を支える扱い手なのです。

福岡はプレーパークとして常設の場がなく、冒険遊び場の後進地域です。福岡でプレーパーク活動を展開するにあたり、この活動をみなさんによく知ってもらうこと、プレーパークを福岡に広く紹介・普及することに今取りかかったところです。現在、各地域のこれから遊び場をつくろうとしている人たちに向けて、「一日プレーパーク」、「公園プレーパーク」等の企画を行うことで、少しずつですが素敵な遊び場が生まれてきています。また、福岡県内でプレーパーク活動に取り組んでいる地域団体とネットワークを確立し、遊び場に関わる人、子育てに悩んでいる人、行政、地域、保護者などがこの活動を中心に有機的に連携して、プレーパークから活き活きとした地域社会を作り上げていくことができればと考えています。さらに、専属プレーリーダー育成に向けてのプログラム等の企画を推進できればと考えています。



2

福岡における多様な子どもの遊び場事例

～こんなところでもあんなところでもできるんだ～



おうちでプレーパーク

～子どもにとっていちばん身近な遊び場～

いちばん身近な場所、自宅でのちょっとしたプレーパークでも、子どもたちは思いのほか、のびのびと遊ぶことができます。

2006年8月、飯塚市のあるお宅にて「おうちでプレーパーク」を開催しました。この日の天気は快晴。最高気温は35℃でしたが、参加した20人の子どもたちと6人の大人たちは、思う存分、家の外で遊びました。その様子を、おうちを提供した本人がレポートします。

● プレーパークって何？

「プレーパーク」と初めて聞いたとき、「どこのテーマパークですか？」なんて、聞き返した私は、いろいろ説明されてもよくわかりませんでした。そこで、2回ほど、あるプレーパークを行っている場に直行しました。その子どもと大人の雰囲気が、一昔前の井戸端会議を少し連想させるような、そしてキャンプに行ったときのような開放感を感じさせるようなものでした。「これなら、自分でもできることをまずやってみたい」と思い、今回の「おうちでできるプレーパーク」を計画しました。



● 家の広さ、環境など

うちは全く広くありません。庭は、3メートル×5メートルくらいの猫の額のような小さなものです。そして、まわりもうちと変わらないくらいの家がたくさん建っています。いわゆる新興住宅地です。

● 当日内容

<ビニールシート製プール>

周りを4つの長机でかため、中にビニールシートを入れ、長机の天板下の金具にビニールシートをひもで結んだもの。ペットボトル、おもちゃをくいで遊んでいました。



<テント>

15年ぶりに家のテントを出してみました。かんかん照りだったので、日陰にできました。



<ゴムとび>

懐かしのゴムとび、お母さん方はかなり懐かしがり、「くるぶし、ひざ、腰・・」などと高く上げていきました。「女とび」を今的小学生は知らず、見かねた1歳児の母は泣く子を兄弟児にだっこさせ、華麗に「女とび」をやってのけ、小学生から羨望のまなざしで見られて嬉しそうでした。



<ポップコーン作り>

卓上コンロに大きめの鍋をかけ、乾燥したポップコーンとサラダ油を入れます。しばらくすると、鍋から「ポン、ポン、ポポン」とはじける音。鍋のふたを取ったときの子どもたちの顔。みんなで、膝をつき合わせて一つのことを見て、同じ感情を持つことって、こんなに気持ちいいんだと、改めて思いました。



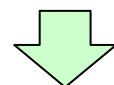
<チョーク>

かかしのケンケン遊びをしました。決まった枠のなかに石ころを投げ込むのは今的小学生にはとても難しく、これもまたできたお母さんは羨望の対象。



<スイカ割り>

差し入れのスイカで、急遽スイカ割りをしました。小さな子から順番に竹棒を持って、目隠しをします。年の数だけまわされ、いざ、周りの声に合わせて、進んでいきます。ドキドキ・ハラハラしました。



<巻き巻きパン>

バーベキュー用具に炭火をおこします。そして、みんなで、こねて発酵させたパン生地を竹棒に巻き付けて、炭火であぶります。暑くて、自分からも湯気が出そうなのにパンができるのを待っている時間はゆったりしていて、時間の優しさを感じます。ワインナーやマシュマロを焼いておいしく食べました。



● 条件は遊び心

この猛暑の中、自宅でプレーパークをするならどうやって「涼」をとるかということが、当日前まで、いつも私の頭の片隅にありました。そして、ある朝、「よし、ビニールシートと長机で作ってみよう」とアイディアが浮かびました。それからは、このアイディアを実行したくて、前日猛暑の中一人でプールを作り始めました。今考えると倒れそうなんですが、あの時は、とても楽しかった。子どもの気持ちに戻れたようで、ウキウキしていました。自分のイメージを持ち、それを実行していくこと。生活とかけ離れたどうでもいいことを真剣に考えるのって、とても楽しい。これが「遊び心」だと思います。

● ペースはマイペース

プレーパークは、参加している人のペースで同じ時間と場所を共有できるところが素敵。活発な子は活発に、のんびりした子はのんびりと。誰に比べられるでもなく、自分のペースを守れることはゆったりとした時間を感じさせてくれます。

● 叱れる大人

順番を待てない子、落としたパンをすぐに捨てようとする子、泥を汚いという子。子どもは正直に自分の気持ちを表して来ます。こんな時、どう対応したらよいのか、私は悩みました。古賀さん（福岡プレーパークの会）が、子どもたちを、ビシッと叱ってくれました。「並んでいる子の前に行かない。」「落としたパンはもったいないから泥が付いているとこだけ、ちぎって。」「泥は汚くないよ。何にも汚くないよ。」子どもたちはすぐに従います。かっこよかつたなあ。



2-2

公民館でプレーパーク

～子ども体験事業としての展開～

穂田公民館では平成11年度から子ども会指導者連絡協議会と協働し、「地域の人・もの・こと」を活用して、子どもたちに豊かな体験機会を提供し、「生きる力」を養うことをねらいとして「わくわくチャレンジ隊」という子どものための体験事業を行っています。年間を通して月1回のペースで開催しているのですが、今回はじめてプレーパークに取り組みましたので、レポートします。

- 日 時：2006年8月5日（土）11:00～15:00
- 場 所：飯塚市穂田公民館前広場
- 天 気：快晴
- 参加者：子ども（0歳～中学生）40名、大人20名



● プレーパークを企画した背景

①インリーダー講習会に参加した子どもたちが地域で活躍する場を作ること。

（今回は英彦山で学んだピザ作りを地域の子どもたちに教える場）

②遊びを通して子どもたちの人間関係能力や自主性・自発性、思いやりの心などをはぐくむ。

（これまで「わくわくチャレンジ隊」では伝統文化、スポーツ、食、ボランティアなど、さまざまな分野の体験の機会を提供しながら、子どもに必要な資質・能力を育んできましたが、まだ取り組んだことのない「遊び」体験を通して、子どもたちの体験の幅を広げたいと考えました。）

上記①②の目的の上に、プレーリーダーの人的支援が受けられる条件が整ったことで、公民館でのプレーパークは「はじめのいっぽ」を踏み出すことになりました。

【インリーダー講習会とは】

毎年1回小学4年生～中学生を対象に実施する1泊2日の講習会。日頃できない直接体験を通し、自主性、創造性、協調性を養い、心豊かにたくましく生きることのできる資質や能力を育成するとともに、社会参加および地域におけるリーダーとしての活躍・活動を促進することを目的とする。今年度は7月に34名の子どもたちが英彦山青年の家で研修をし、仲間との集団生活を送りながら、フィールドビンゴやキャンドルのつどい、ピザ作りなどの体験をしました。



● 準備

<草刈り>

プレーパークの場所は公民館前の遊具も何もない広場。水道が利用でき、プレーパークを開催するには恵まれています。ただ、雑草が伸び放題で、普段子どもたちが遊ぶ姿はほとんど見られないのが現状でした。

そこで、準備はまず一面に伸びた雑草を刈ることから始まりました。公民館職員4名とボランティア2名で、2台の草刈り機と鎌を駆使して草刈りにとりかかりましたが、広場一面の雑草を刈るのは容易なことではなく、午後から夕方まで全員汗だくで作業して、ようやく荒刈りができました。その後、日を改めて、芝刈り機で全体をきれいに刈り取り、ようやく場所の準備ができました。



<ブルーシート>

開催2日前、今回協力してくれるプレーリーダーのお二人が会場の下見に来られ、広場にある斜面を見ながら「この斜面にブルーシートを敷いて、上から水を流すと、ウォータースライダーになって楽しいですよ。」と一言。そこで急遽ブルーシートを準備することになりました。

<ダンボール・木切れ>

自由遊びの中にダンボールや木切れでの工作を取り入れようと、材料であるダンボールを病院、大型電気店、スーパー、ディスカウントショップなどを回って大量に集めました。

木切れはピザ釜の焚き木と共に、子ども会の会長が手配。道具のかなづち、のこぎり、くぎ、ハサミ、ガムテープなどは公民館にあるものを使うことにしました。

<ピザ釜>

ピザ釜に必要なのはレンガと鉄板、ピザを出し入れする長い取っ手のついたヘラ。これらの道具は、他地区の子ども会（2ヶ所）から子ども会会長を通じて借用しました。

<ピザ材料>

今回のピザ作りでは、トッピングの材料を各自持参していましたが、生地の材料やスタッフのトッピングは主催者側で準備しました。その費用は子ども会指導者連絡協議会から支出し、事前の買い物も子ども会の役員さん方が担当してくれました。

● 当日の活動

<準備>

インリーダーの子どもたちは開催の1時間前に集合し、公民館から机やレンガ、ダンボールなどを運び、会場の準備をしました。

<ダンボール遊び>

ダンボールが広場に広げられると、開始時間を持たずさっそく「これ、どうするん？」と周りに集まってくる子どもたち。広場には日かけらしい日かけはありません。「暑いね！日かけでも作ろうか？」というプレーリーダーの一言に即反応した子どもたちは、ダンボールをガムテープで張り合わせ、どんどん家のようなものを作っていました。ぺったんこのダンボールをその

まま使う子もいれば、箱に組立てて使う子もいて、いろんな工夫をしているなあと感心しました。



開始時間になり、スタッフとインリーダーの紹介をして、いよいよ「わくわくプレパーク」の始まりです。

<ピザ作り>



まずは全員で、お昼に食べるピザ作りにとりかかります。材料を量り、ボウルに入れて混ぜていくと、ベタベタの生地がだんだんまとまります。それをよくこねて、なめらかになったところでラップをかけて発酵させます。そのときに自分のものとわかるよう、それぞれが葉っぱなどで目印をつけておきました。



インリーダーの子どもたちはピザ釜作りとまき割りの作業です。さすがに一度体験しているだけあり、英彦山での講習会で習ったことを思い出しながら慣れた手つきでまきを割っています。その姿が少し頼もしく感じられました。

<斜面でウォータースライダー>

生地が発酵するのを待つ間に、斜面にはブルーシートが張られていました。ロープを通した両端を木にくくりつけ、間をペグで打ち付けてシートを固定します。滑り降りたところにちょうど溝があり、危険が予測されたため、その溝にダンボールを詰め、上に板を置き、その上にブルーシートをかぶせる工夫をしました。

そして、ホースで上から水を流します。最初は「水は流さんでいい。」「汚れる。」と言いながらダンボールの上に乗って滑っていた子どもたちが、プレーリーダーの声かけ（「いっしょに滑ろうよ！」）で1人、また1人と洋服のまま水の流れる斜面を滑り出しました。一度覚悟を決めて滑ってしまえば、2回目からはどんなに濡れても汚れても平気のへっちゃら！どんどん子どもた

ちが集ってきて、次から次へ滑り出しました。途中下にたまつた水をモップで拭いたり、ホースを持ってみんなに水をかける役割を自分から買って出る子も現れ、大きな歓声が上がりました。水しぶきと一緒に子どもたちの笑顔も太陽にキラキラ輝いていました。



遊んでいる間にピザ生地が発酵したので、各自好きな食材をトッピングして、オリジナルピザを作りました。それを手作りのピザ釜に入れて焼きます。次々に焼きあがるピザを子どもたちはさっそく自分で作ったダンボールの家に持ち込んで、美味しいように食べていました。



<ゴムとび>

食事のあいだもスライダー遊びは何度も何度もあきることなく続きます。大きい子どもたちが楽しそうに遊ぶのを見ながら、小さい子や女の子たちは、「やりたいけど入れない…でもやってみたい…」とうらやましそうな表情。そんな時、プレーリーダーがさ

りげなく輪ゴムを持ち出し、つなぎ始めました。長く長くつながっていく輪ゴム。女の子たちがそれをまねして作り始めます。一人一人のつなげたゴムを互いにつなぎあわせると長い長いゴムとびのゴムができあがりました。



それを使ってさっそくゴムとび開始です。最初は低く、だんだん高く。女とび、正面とび、いろんなとび方でクリアしていく子どもたち。どんどん盛り上がってきたところに、スライダーで遊んでいた男の子たちもやって来ました。高学年の男の子の飛び方はダイナミック。迫力があります。



そうやって今までスライダーで遊んでいた子がゴムとびに移ったことで、スライダーがしたくても一歩引いていた子どもたちにチャンスが回ってきました。めでたくスライダーにたどりついた小さな子どもたちも、びしょぬれになりながら心ゆくまでスライダーを楽しんでいました。

思いきり遊んだ後は、子どもたちや保護

者の方々と一緒に後片付けをして、プレーパークは終了しました。すり傷程度のケガはありましたが、大きな事故もなく、スタッフはホッとしました。遊びに夢中になっている子どもたちの輝く笑顔を見ることができ、大人も元気をもらった1日でした。

● プレーリーダーから学ぶ

今回はじめてのプレーパークを開催するにあたって、3人のプレーリーダーに来ていただきました。

プレーリーダーの方々が場を作っていく様子や、子どもたちへの声かけの方法を間近に見て、以下のこと気に気づきました。

①会場の準備はその場に来ている子どもたちと一緒にやるくらいの気軽さが必要。肩に力を入れて完璧に準備しなくても大丈夫。その場その場で臨機応変に。準備も楽しむくらいでいい。(結局木切れは準備したけど使いませんでした)

②子どもと一緒にになって楽しむことができる心を持つことが必要。子どもが最初のいっぽを踏み出せないでいるとき、自分がやってみて楽しさを伝える。それは決して「これをしなさい。」ではなく「こんなふうにしたらおもしろいよね。」という姿勢でした。

③プレーパーク全体の遊びの様子を常に見て、適切な働きかけ(指示ではない)をするプレーリーダーの存在は子どもの遊びを深めたり、場の規律を守ったり、子ども同士の関係性をつくる大事な役目を果たしているということ。

● 公民館開催のメリット

①道具類がある程度そろっているので、新たに購入しなくてもよかったこと。

②子ども会指導者連絡協議会との連携ができること。

③充実した広報活動(小中学校を通じてチラシを対象の子ども全員に配布し、公民

館だよりにて告知、報告記事を掲載)ができたこと。

④市が管理する広場の使用(水道の利用も含めて)が容易にできること。

⑤自治公民館総合保険が適用されたこと。

● 成果と課題

①「自分の責任で自由にあそぶ」プレーパークの楽しさを子どもも大人も体感し、共有したこと。

②インリーダーの子どもたちが学んだ成果を發揮し、地域で活躍する場作りができること。

③参加した親や子ども会指導者が、自分の子どもだけではなく、その場にいる子どもたちみんなのために参加し、声かけをしながら子どもの活動を支えてくれ、このことが、地域ぐるみで子育てをするために大切な人の輪を広げる一助になったこと。

④今回は初めての試みということで、プレーリーダー3名の力を大いに借りて開催したプレーパークでしたが、体験したことによって「プレーパークってどんなもの? どんな意義がある?」ということが、公民館のスタッフ、子どもたち、保護者、子ども会指導者にある程度共通理解ができました。今後は、子ども会指導者連絡協議会や単位子ども会、公民館を中心として、もっと子どもたちに身近な地域で、自主的、日常的に子どもの遊びを支え、広げていくための場作り、人作りをすすめることが課題です。



2-3

箱崎商店街「きんしゃいきゃんぱす」

～日常的な子どもの遊び場・立ち寄り場～

「きんしゃいきゃんぱす」は、九州大学大学院の学生たちが福岡市東区の箱崎商店街の空き店舗に開設した遊び場です。高齢化が進む商店街の一角が、今小学生の遊び場（立ち寄り場）として活気に満ちてきています。

■場 所：福岡市東区箱崎1丁目 箱崎商店街きんしゃい通り内

■日 時：平日の午後、2時間程度（小学校の放課後に合わせて）

● きっかけ

きっかけは2年前、九州大学大学院人間環境学研究院の教授が大学をまちに開いていこうと商店街の中に研究室の分室を作り、最初は学生たちが論文を書いたり、研究資料を読んだりしていました。そのうち、「せっかく商店街にいるんだから」ということで、学生たちがかき氷を格安で販売したり、やってきた子どもと遊んだりしていたところ、近くの箱崎小学校の子どもたちが放課後自然に集まってくるようになりました。

毎日繰り広げられる学生たちのユニークな試みに、集まってきた子どもたちは興味津々。「僕にもやらせて！」「私も手伝う！」と子どもたちが積極的に関わってくるようになり、いつの間にか子どもたちが自由に立ち寄って、自由に遊べる場所になっていきました。現在、この場所を運営しているのは、心理学・教育学を専攻する大学院生・学部生5人です。

● 子どもたちの立ち寄り場

“開館”は、平日の放課後の時間に合わせて2時間程度（土曜日に開けることもあります）、代表の山下さんを中心に学生が入れ替わりに子どもたちの相手をしています。家賃は当初、学生たちのカンパで支

払われていましたが、昨年から市が活動資金を助成しています。「カバンおいたらすぐ来るけん！」下校中の子どもたちが足早に行ったり来たり。当初分室だった空間が、今では子どもたちの遊び場（立ち寄り場）としてすっかり定着していて、毎日20人前後の子どもたちが立ち寄り遊んでいます。



きんしゃい通りの中にあるきんしゃいきゃんぱす



大人に見守られて遊ぶ子どもたち

● 縁台（バンコ）は地域のふれあいの場



箱崎商店街の路上は大賑わい



縁台は自由な遊びの空間となっている

この遊び場の特徴は、商店街にあることから常に周囲の大人に見守られた環境であり、そこから子どもと大人（商店主や買い物客）との豊かな関わりが生まれていることです。道幅も狭く車の往来もないため路上遊びも楽しめます。遊び場としてはじめから想定された場所ではないため、この空間では子どもたちが柔軟にいろんな発想で遊んでいます。たとえば、屋内で工作やゲームをして遊んでいた子がジュース屋さんをはじめたり、商店街の調査を名目にデジカメでいろんなお店の様子を写真に撮ったり、お店の人が飼っている犬を散歩させたり、公園でおにごっこをしたり、子どもたちが自ら遊びを見つけています。そして、なんといっても目が輝いています。運営に関わっている学生たちの「子どもたちがあくまでも主体性を持って遊べる環境を大切にしたい」、「子どもたちの『やってみたい！』という気持ちを大切にしたい」という強い思いが、子どもたちの遊び心をより一層かきたてています。

↓路上縁台ピンポン大会



↑縁台でおじいちゃんと遊ぶ子どもたち

←縁台ピタゴラスイッチ

● 地域コミュニティの再生

地域における遊びの環境は後退する一方ですが、自然発生的なここでの取り組みは地域における子どもの貴重な居場所を創造しているだけではなく、この空間から周囲の大そして商店街全体を巻き込んで地域のコミュニケーションを活性化しています。「きんしゃいきゃんぱす」は子どもの遊び場を中心、我々が失った古き良き本来の地域コミュニティを再生させた素晴らしい“まちの縁台”です。



商店街の犬の散歩



常連のおじさんに見守られて

北九州市立大学 ミニ・プレーパーク

～大学と市民のコラボレーション～

- 主催者名：乳幼児子育てネットワーク・ひまわり+公立大学法人北九州市立大学
- 協 力：コラボラキャンパスネットワーク、高齢社会をよくする北九州女性の会
- 参 加 費：一回につき一般 200 円 会員 100 円（材料代・保険代含む）
- 対象年齢：制限なしだが乳幼児中心
- 開催日時：不定期年数回
- 場 所：北九州市小倉南区北方四丁目2番1号 北九州市立大学内4号館前広場
- 内 容：ダンボール遊び、ビニールプール、たなばた飾り、お手玉作りほか
- 飛び入り：大道芸愛好会

● ミニ・プレーパークの一日



4号館前広場。適当に木陰もあって気持ちのよい芝生広場です。



準備開始。
たいした荷物はありません。



プレーパークの看板が
上がれば開始です。



参加費を取るので受付があります。



さっそく、ダンボール列車に乗り込みます。



シャボン玉は、調合を間違ったのか、ちっともうまくいきません。



というわけで、水遊びに変更！
失敗こそが、プレーパークの楽しみ



お手玉の作り方。
これが、じゅずの実です。



びしょびしょ～、じゅぶじゅぶ～
きもちい～い



大道芸愛好会登場！
お手玉名人と勝負だぁ～



おねーちゃん、はいっ！



あたしのたなばた



ベンチですやすや



撤収！
後片付けも手馴れたものです。

● コラキャンネット

乳幼児子育てネットワーク・ひまわりは2004～2005年度にかけて、小倉北区内の空き保育所を使用し、他の市民団体との協働で、子育ち・親育ちコラボラひろばを開いていました。この事業は保育所の取り壊しで終了することになりましたが、市民に開かれた大学を目指す北九州市立大学が協働事業の提案を受け入れ、「コラボラキャンパスネットワーク事業」が2006年1月から始まりました。



ボランティアの集まるコラボラカフェ、乳幼児親子の集まるフリースペース「ハロハロ」、プランターを使ったコラボラ菜園などの乳幼児親子に向けた事業の一環として、ミニ・プレーパークを4月～6月にかけて4回開催しました。



● 大学側から見て

北九州市立大学 副学長 近藤倫明教授



大学の法人化に伴い、市民から支えられているという感覚が強くなりました。地域の大学として公開講座等を行ってきましたが、その考えをより鮮明にしていきたいとの思いから、コラボラキャンパスネットワーク事業を始めました。カリキュラム外の社会教育事業ですね。その一環として、今回のミニ・プレーパークが開催されています。

学内に子どもがいることで、社会には子どもがいるのだという当たり前のことだが、学生にも自然に感じ取られます。特に人間関係学科（教育・心理・福祉分野）の学生にとっての影響は大きいでしょう。



プレーパークが本来、土を掘ったり、火を使ったりでき、制約が無い自由な遊び場だということは理解しています。しかし、ここは大学施設であり、当然、たくさんの制約があります。ただ、考えてみれば、全く制約の無い自然の中でも、身を守るために何かしらの制約が出てきます。結局、制約を乗り越えて、どのくらい自由に遊べるのかがテーマなのでしょう。そう考えると、制約がたくさんある施設の中でプレーパークをやる意義が、新たに見えてくるのではないかでしょうか。



●北九州市立大学「野研」が開発したスタードーム

● 参加者の声

<大学生>

●広場で凧揚げをしている子どもたちを通りがかりに見ていただけたけど、いつの間にか自分も子どもと一緒に凧揚げを楽しんでいました。小さな子どもたちやその親たちがいることで、今までとは違う大学という感覚をもちました。

- かわいい。妹のめんどうを見ていたことを思い出しました。
- 体力勝負ですね。大変だけど楽しいです。



通りがかりに見ていただけたけど、いつの間にか自分も子どもと一緒に凧揚げを楽しんでいました。小さな子どもたちやその親たちがいることで、今までとは違う大学という感覚をもちました。

<母親>

- いっぱい水遊びして、もう、眠くてしようがないみたいです。
- おねえちゃん、おばあちゃん、それぞれに違う遊び方で遊んでくれて、とても楽しい。
- おにいちゃんに、とてもなついて遊んでもらいました。

● スタッフの声

<グラナマさん>

(高齢社会をよくする北九州女性の会)

- 楽しんでまーす！コラボラ菜園も楽しみです。
- 笹飾りを作ったのだけど、お母さんから珍しい折り紙のやり方を教えてもらったりして、教えて、教えられてと楽しかったです。



●学生さん、げっとぉ！

<ひまわりネットスタッフ>

- 子育て中の私たちにも開かれた学び舎になっています。
- ミニ・プレーパークだと、通りがかりの学生さんが声を掛けてくれたり、サークル単位で関わってくれたりして、いろいろな交流が生まれます。

● 取材を終えて

大学という大人が使うことを前提とした建物に乳幼児が入ることで、建物そのものが別の顔に見えてきました。例えば、玄関の階段が乳幼児のベンチや遊び道具になっていたり、広場のベンチがジャングルジムのように見えてきました。



ベンチに登ったり降りたりする子どもの横で、お昼を食べている大学生は、とても優しい目でその子を見守っていました。

赤ちゃんにおっぱいをあげている母親の横を通りすぎる女子大学生は、チラッ、チラッと何度も親子の様子を見ていました。



学生食堂で大学生と一緒に並ぶ親子。子どもを抱っこしてお母さんとおしゃべりする学生。大学の広場で水遊びをする子どもの歓声。車止めのプランターでくすぐり育つレタスやミニトマト。そこには、今までにないプレーパークの姿がありました。



2-5

九大探検！

～大学だって遊び場に！！～

■名 称：九大探検！

■主催者名：きんしゃいきゃんぱす十箱崎校区子ども会育成連合会

■対象年齢：小学生（箱崎校区）

■参 加 者：子ども 91 名、保護者 36 名、スタッフ 22 名（大学院生・大学生）

■実施日時：2006 年 3 月 19 日(日) 12:00~16:00

● きっかけ

箱崎の子どもたちにとっての九州大学は、近くにはあるけれど普段はなかなか足を踏み入れない不思議な場所・・・。九州大学の敷地内に何があるのか知らないし（学食や ATM に驚く子どもがいた）、どんな人たちがいるかもよくわからない（外国人との交流に喜ぶ子どももいた）、そもそも大学生活の様子さえまったくわからないかもしれない。

そんな九州大学の隅々を、子どもたちが大学生とともに探検をして回る「九大探検！」が、きんしゃいきゃんぱすと箱崎校区子ども会育成連合会との共同で開催されました。

● 開催までのいきさつ

きんしゃいきゃんぱすは、2005 年度に、大学と地域を結ぶ活動を助成する事業「東区コミュニティユース 2005」の助成を受けました。それを機に箱崎校区子ども会育成連合会と連携し、「九大探検！」の共催に至りました。当日には、当初の予想を遥かに超える参加者（子ども 91 名、保護者 36 名）が集まり、大々的に「九大探検！」が開催されることになったのです。

● 「九大探検！」概要

「九大探検！」では、九州大学という素材を活かし、子どもたちとともに遊びながら九大の魅力を発見するとともに、九大と箱崎の子どもたち、さらには箱崎のまちとの接点を作りたいと考えました。具体的には、子どもたちの興味・関心をベースに素材を選択し、何かを「体験する」「発見する」「見方を変える」というアプローチによって、子どもたちの好奇心・自主性を引き出すような探検です。

参加者は 8 グループに分かれ、九州大学の敷地内をウォークラリー形式で駆け巡りました。各ポイントがミニ・プレーパークのイメージです。ところどころで休憩しながらも、各ポイントでは思いっきり遊ぶ、そんな「九大探検！」でした。



①文系池周辺

さまざまな種類の紙飛行機を飛ばしてみたり、折り紙を折ったりして、のんびりと過ごしました。池のモニュメントに登ってみる子どもたちもいましたよ。



いろんな紙飛行機を作つてみよう

②六角堂

ブラインドウォーク：アイマスクをして、凸凹の地面を歩いてみよう！友だちの案内を信頼しながらも、恐る恐る歩き回つてみます。いろんなところで叫び声が聞こえていました。



地面の感触を確かめながら

③教授室

天井のプロペラに書かれている文字を読み取れ！これが結構難しい。みんな上を向いて、必死に読み取ろうとしています。大学教授との交流もありました。

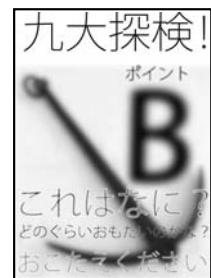


「なんて書いてあるんだろう？」

「目が回るー！」

④巨大イカリ

九大に展示されている巨大イカリの重さクイズのはずなんだけど、思いっきり飛び乗っちゃってます。とっても楽しそう。そしてちょっと羨ましい。



「飛び乗っちゃえ！！」

⑤中央図書館

巨大な図書館の中を探索して回ります。93万冊もの本にビックリ！



書庫にはとて

も古くてボロボロの本もありました。留学生との交流もあり、帰りには記念に自分の生年月日の新聞記事もプレゼント！



図書館に潜入開始！



図書館を探索、ちょっと休憩



留学生との交流タイム！

⑥危険地帯

「危険！」のマークを探せ！下見では11個のはずだったんだけど、子どもたちは13個も見つけたとか。



マークはいくつ見つかるかな？

⑦移動中

大学の建物の中や外をこっそり探索中。普段は目にしないものがいっぱい。でも、小学校と変わらないところもたくさんあったかな。



建物内は
← やっぱり
ドキドキ



大学にも慣れてきたかな

⑧ゴール！

ウォークラリーが終了すると、ゴール地点はまるでプレーパーク。九大内の大きな道路にチョークでダイナミックに落書きをしてみたり、思い思いにバルーンアートをしてみたり。終了予定時間を大幅に超えて、子どもたちは活き活きと遊びまわっていました。



バルーンアートに挑戦だ！



道路に落書きしちゃいました

● 参加者の声、スタッフの声

ある子どもに、「どこが一番楽しかった？」と尋ねると、「うーん、全部楽しかった！」という答えが返ってきました。また、

「九大に来たことはあったけど、建物の中に入ったのは初めてだった」という言葉も聞こえてきました。みんなそれぞれ、体いっぱいに楽しむことができていたのではないでしょうか。保護者の方々からも、「地域の人が九大の図書館を利用することができます

るとは知らなかった」「バルーンアートが本当に楽しそうだった。子ども会でも取り入れたい」という声を聞くことができました。これをきっかけに、九州大学をもっと身近に感じてもらえればと思っています。

一方スタッフは、運営上の反省点を振り返りつつも、子どもとの関わりに手応えを感じることができたようです。何よりスタッフ自身も一緒にになって楽しめたようでした。

● まとめ

今回は初めての開催ということもあり、プログラムを設けるかたちで「九大探検！」を実施しました。しかし、その枠に収まらない豊かな遊び・発見も随所に生まれていました。そしてそれが糸口となって、プレーパークへつながっていきそうな手応えを感じています。だからこそ次回は、こちらで遊びを準備してしまうのではなく、もっと子どもたちが自由度をもった遊びの時間・空間にしたいと思っています。最初から完璧なプレーパークをする必要はありません。子どもたちと一緒に、これからプレーパークにしていけばいいんだなと思いました。

今回の「九大探検！」では、九州大学という素材を活かすということを心掛けました。それは、[1] 大学の専門性を活かしたもの（巨大図書館巡り、教授室）であり、

[2] 九大生との交流（スタッフ・留学生との交流）です。さらに重要なのは、[3] 九大の敷地内で遊ぶ・探索するということです。九大も同じ箱崎のまちです。子どもたちがまちの中で生きるように、大学も同じまちとして関わってほしいというのが、私たちの思いのひとつでもありました。きんしゃいきゃんぱすの活動も含め、「まちを遊ぶ」ことが私たちの想いであり、プレーパークへの第一歩ではと思っています。

● 大学の協力

「九大探検！」の実施にあたって、大学側は非常に協力的で、意外と一般の人も入ることができるということに気づきました。もしかしたら、子どもたちの周りには、予想以上に入り込める隙間がたくさんあるのかもしれません。大学に限らず、それぞれのまちの資源を活かすことで、子どもたちがまちで遊び、まちを遊び、まちに根付いていくのではないかと考えています。

● 大人の存在

子どもと一緒に遊ぶ大人も重要な存在です。子どもの遊びの広がりに余裕を持って付き合う、というよりも、一緒にやってみる大人の存在が、子どもの遊

びをさらに展開させます。しかし、何かあったときには大人としてしっかりと関わることも必要です。私自身はまだまだ未熟で、試行錯誤ばかりですが、子どもと関わる大人として、そのような姿を示すことのできる魅力的な大人になりたいと強く思っています。

● 課題

課題もたくさんありました。例えば、「九大探検！」に子どものアイディアを取り入れよう、ということで、子どもたちの声を聞いたのですが、「留学生との交流」しか実現に至りませんでした。しかし、第一歩が踏み出せたわけで、そこを足がかりとして、これから子どもたちと一緒に「九大探検！」を発展させていきたいと思っています。



2-6

前原のプレーパーク

～“やおおいかん”を楽しんでます！

子どもも大人も思いっきり遊びたい～

■主催者名：まえばるの遊び場みたい！

■参加費：なし

■対象年齢：不問

■駐車場：有り

■開催日時：毎月第1土曜日（変更あり）10:00～15:00

■住所：前原市潤1-22-1 前原市健康福祉センターあごら内 やすらぎ広場

■HP：<http://itogra.com/news/playpark/pp.htm>



● 前原市最大の小学校区で

前原のプレーパークの開催地は、前原市東部の田園地帯にあります。この10数年、福岡市のベッドタウンとして転入者が増え続け、今春新設校ができて分離するまで、前原市最多の児童数を有する小学校区でした。「遊び場所がない」というのが子育て中の親から頻繁に聞かれる言葉。児童公園や神社の境内など、主な屋外の遊び場（27カ所、平均面積350m²弱：2000年「子育て応援講座ママといたずらキッズ」受講生調べ）があまり利用されず、校区外の広い公園や、放課後の校庭でスポーツ団体を邪魔しない程度に遊ぶという状況。周辺の田んぼや川で遊ぶ子どもの姿もまれでした。

● 「まえばるの遊び場みたい！」 のあゆみ

＜母親たちが動き始める＞

2001年、糸島の豊かな自然と人とのふれあいの中で子育てしたいと、前原に住む母親が自主保育「おひさま遊ぼう会」を立ち上げ、神社や川に乳幼児を連れ出して親たちの見守りの中で遊ばせ始めました。同じ時期に「あいあいネットワーク」（糸島地区の育児サークル自主ネットワーク）が、東京から矢郷恵子さん（しんぼれん代表）を招いて講演会を開催。乳幼児から小学生以上の子どもたちまで自然の中でのびのびと遊べる場を目指し、自主保育の仲間を中心に「冒険遊び場つくり隊」が結成されました。

<山の中のプレーパーク>

話し合いを重ねつつ、数組の親子が休耕地で遊び始めましたが、2004年、高祖山の中腹にある「里山野遊び宿」を借りて月1回の開催が始まりました。木々の間につくられたスライダーやブランコで遊んだり、かまどで料理をしたり。コンパネの小屋など、子どもたちが作ったものも少しずつ増えていきました。でも子どもだけで入っていいける場所ではない上、次第に前原市民よりも、自然を求めて遠方からやってくる人の割合が多くなってきたことに矛盾を感じるようになり、場所を変えることになりました。



↑木にかけたブランコ

→ツリーハウス



→火の周りに集まる

<子どもの足で行ける場所に>

いつでも行ける身近な場所として、2005年度から「前原市健康福祉センターあごら」(以下「あごら」)の広場を借りて、月1回開催しています。ここは地域住民が犬の散歩程度にしか訪れない場所でしたが、遊び場を開催するにあたり、前原市社会福祉協議会(以下「市社協」)が土を入れ、築山が作られたことで、普段も小中学生や乳幼児の遊び姿が見られるようになりました。

ここを本拠地とした遊び場が定着してきたことで、“冒険遊び場をつくりたい”という願いを込めていた団体名を、“前原を象徴する遊び場に！”という思いにかけて「まえばるの遊び場みたい！」に改称しました。



飯ごうで炊いたもち米の
おもち↓



前原市健康福祉センターあごら「やすらぎ広場」

● プレーパークの一日

<午前9時>

スタッフ集合。軽トラックで廃材や道具類を保管しているスタッフ宅から現地へ運び、芝生の広場に大まかにコーナー(木工、段ボール、水・泥遊び、火の各コーナー)を設けます。受付は全体が見渡せる場所に設置。参加者には校区別に分けたペットボトル容器に一つずつ“ドングリ”を入れてもらい、人数を把握します。

<午前10時>

子どもたちが思い思いに動き始めます。一輪車に小さい弟を乗せて広場を一周する小学生、縄ばしごを掛けようと木のそばでがんばっている大人をロープで木にグルグル巻きつけて大喜びしている子。半分に切ったドラム缶の前では、火を起こそうと小学1、2年生の子どもたちが交代でマッチを擦ります。釘さし、モンキーロープ、段ボールのトンネルづくり・・・。子どもに混じってベゴマに挑戦するお母さん、子ども時代を取り戻したかのよう。広場の中央では、段ボールや布を使って、一家総出の基地づくりが始まりました。



釘さしに燃える小学生



築山に段ボールでトンネルをつくる



段ボールに入ってどこまでも転がる



家族で力を合わせて
つくった基地



お昼寝は箱の中



語らう小学生たち

<おやつ「バウムクーヘン」作り>

大人が一番楽しみにしていたおやつ作り。今日はバウムクーヘンです。スタッフ宅から切り出した竹筒をドラム缶にわたし、火であぶってバウムクーヘンの生地を薄くのばします。竹から出た油で生地が滑りポトポト落ちていくので、「これでいいの?」と心配しながら生地を塗り、両側で竹筒をグルグル回します。



だんだん竹筒の表面に生地が定着し始め、いい匂いがしてくると子どもたちも集まってきて「味見したい！」



待ちきれない子どもたちは、マシュマロやソーセージを竹の枝に刺し、七輪であぶって食べます。



2時間ほどで種がなくなり終了！少しさまして竹筒からバウムクーヘンを抜き取ると、人がどんどん集まってきて興味津々。



ナイフの代わりにカッターで入刀、すると切り口には6層の輪が！思わず歓声が上がります。最後まで竹筒を回し続けたお父さんたちはじめ、子どもたち、そして見ていた大人たちの口にも感動の味が広がりました。中には「甘い竹輪みたい」という声も！？

<午後3時>

散らばった段ボールを集めて少しづつ片付けが始まり、三々五々帰っていきます。スタッフは再び道具や残った廃材を軽トラックに積み込んで搬出。夕方5時に解散しました。

<はじめて遊びに来たKくんの日記より>

小学2年生のKくんと5年生のお兄ちゃんは、材料の中に台車用の車輪を見つけました。これを木の板に固定するのに、ネジか、ナットで締めるかと大人たちが相談するかたわらで、二人はせっせと手を動かし、とうとうすべて釘で打ちつけてでき上がり！その名も「スクーター」。帰り際に、「きみたちが作ったという証にサインして」とスタッフから頼まれ、名前を記していました。



プレーパークにいきました。といしょに、木とたいやで、スクーターをつきました。おにいちゃんは、ベーゴマのねんしゅうをしていました。おひるに、ウィンターやいぶんなものをやきました。ものすご(おもしろかったです。

● 前原のプレーパークのこれから

<こんな遊び場をつくりたい>

「まえばるの遊び場つた！」は、子どもたちの生活圏内に、温かい見守りのある遊び場・居場所をつくることを目指しています。「禁止事項は設けず、自分の責任で自由に遊ぶ」、それは自分が自分らしく生きることを学ぶこと。子ども同士で育ち合い、遊びが伝承される場、そして土・水・木・火といった自然物を材料に、思いきり遊べる場をつくっていきたいと思います。

<大人の役割>

私たちは「世話人」という立場で、この遊び場づくりに取り組んでいます。昨年度の連続講座でご協力いただいた東京のプレーリーダーは、子どもたちに遊びを伝えると共に、場の雰囲気づくりや人と人とのつなぐ役割も果たされました。その様子から、プレーリーダー的存在の必要性も考えさせられています。

<これからのかの課題>

①開催地の改善

(日陰と思いきり使える水場の確保、子どもの手で掘ることができる土壤に)

②人手を増やす

(さまざまな世代や立場による協力が必要)

③地域との関係づくり

(地域住民に認知され、信頼関係が育つ場に)

④行政との定期的な協議の場を設ける

(まちづくりの視点で)

課題はたくさんありますが、この取り組みの中で、人の輪がどんどん広がっています。子どもたちも、そんな輪の中で見守られ、さまざまな経験をしながら育ってほしいと願います。遊び場づくりは“やおおいかん（簡単にはいかない）”、そんな過程も含めて、子どもも大人も一緒に楽しんでいます。

● 広報および普及活動の様子

プレーパークを広く知ってもらうために、広報には特に力を入れています。「居場所・遊び場を自分たちの手で作りませんか?」という呼びかけと開催予定を載せたチラシを、周辺の小中学校、子育て支援センター、公民館、スーパーなどで配布。開催当日の様子は、糸島地区の生活と文化に密着した情報を提供しているホームページ「いとぐら」と通信で随時報告。2005年11月には「子どもゆめ基金助成事業 冒険遊び場つくり隊連続講座 “やおおいかんを楽しもう！！”」を開催し、行政をはじめさまざまな立場の方々にも知っていただく機会となりました。今年度は「福岡プレーパークの会」主催のプレーパーク普及事業に協力しています。

● 行政との関わり

現在、開催場所と道具類を市社協および社会教育課の協力により使用させていただき、地区の区長さんからは軽トラックをお借りしています。会議の時は子育て支援センターを利用。今年度初めに前原市市長との懇談会をもち、活動の様子と今後の展望について話し合いました。来年度からは市社協の登録団体となる予定です。

城南区プレーパーク

～土、水、木、火…自然の中で思いっきり～

- 主催者名：ふくおかに冒険遊び場をつくろう会
- 参加費：大人も子どもも1人100円（保険料含む）
- 対象年齢：不問
- 駐車場：若干有るが、できるだけバスや地下鉄を利用
- 開催日時：毎月第2日曜日（変更の場合がありますので、HPなどで確認をしてください）10:00～15:00（この間ならいつ来てもOK）
- 場所：西南杜の湖畔公園予定地（福岡市南区干隈2丁目）
- HP：http://www.geocities.jp/bouken_fukuoka/



● きっかけ

私たち大人は、かつては子どもでした。その頃は、まだ原っぱや路地などの遊び場もたくさんあり、遊ぶ時間もたくさんあったような気がします。その中で、年上の子や年下の子が交じり合って遊んでいました。そして遊びながら人間として生きていくための知恵を身につけていきました。

しかし、現在は遊びが成立するための「仲間・時間・空間」がどんどん失われています。そのような状況に危機感を持つ仲間と『自由にのびのび遊べる場を作りたい』と

いう思いから活動を始めました。

また、核家族化が進む中、近所との付き合いも希薄になっていくばかり。子どもはもちろん、私たち大人も自分のまちの中で、たくさんの人と出会い、楽しく暮らしたいものです。

この冒険遊び場を、世代を超えた人々の交流の場にしたい…そんな夢を抱いて、城南区の冒険遊び場は始まりました。

● あゆみ

★ 2002.9.15 に第1回プレーパークを開催しました。

☆ 講演会も実施しています。

2003.2.22

「自己責任の発想が生み出したもの」

講師 天野秀昭氏

(日本冒険遊び場づくり協会理事)

2004.2.21

「住民と行政のパートナーシップ」

講師 矢郷恵子氏

(日本冒険遊び場づくり協会副代表)

2004.7.3

「みんなで子育て」

講師 浜崎幸夫氏(尚絅短期大学教授)

2006.9.3

「子、育て。」

講師 小田哲也氏

(箱崎自由学舎「えすぺらんさ」代表)

このほか、

☆ 救急法講習会

☆ 会合宿・小学生ワークショップ

なども行っています。

● 広報および普及活動

遊び場開催前にチラシを福岡市役所・区役所・市内各公民館等公共施設などに配布しています。

当日の様子を、広報紙「ふくおか冒険遊び場通信」やホームページ「みんなの冒険遊び場」で随時報告しています。広報紙は、遊び場での子どもたちの様子やその他の活動報告などを掲載し、会員および賛助会員に配布しています。HPでも、情報提供を行い、メーリングリストを活用して情報を共有しています。

会は行政機関等から一部助成金をうけて活動をしていますが、参加費や賛助会員の方々からの賛助会費により、活動を続けることができています。

● スタッフの声から

スタッフの方から、「ここでは、親子で季節を感じながら遊べます。春は花や草で草笛ふきなど草遊びを楽しんだり、秋は木に登ってびわをとったり、都会では経験しにくいことができます。また、普通の公園では、親が子ども同士のやり取りをリードしがちになり、親が気を使わなければならぬのが息苦しいことがありますが、ここでは『子どもが主役』と思っている大人がたくさんいるので、とても居心地がいいです。ここに来ると、ホッとします。」という話が聞きました。

自然の中でのびのびと遊ぶことで、子どもたちの感性が育つと同時に、子どもといっしょに遊んだり、子どもの笑顔に触れたりすることで大人にとっても癒しの場になっているようです。

しかし、「活動を始めて5年目になる今、倉庫がない中での毎回毎回の素材等の搬入が難しいという現状があります。」という悩みも聞きました。それでも、「最近ではお孫さんと一緒に来られる方もいて、身近な素材を駆使してさまざまなものを作ったり、スタッフもときには教えてもらったりしています。毎回の、参加者との交流が楽しみでもある昨今です。」と、悩みを吹き飛ばす楽しさを毎回見いだしているスタッフのみなさんのたくましさを感じることができました。



● ある日の様子



東京で活躍中のフレーリーダー

やはり、ひきつける何かがある・・・
周りにはいつの間にか子どもたちの
輪ができます。そんな中でもブレー
リーダーの手は休まず動いて、楽しい
遊び物がいくつも生まれていました。



参加者持ち寄りの野菜でお鍋！

シンプルな味噌味だけど、
外で食べるとめちゃうま。不思議だなあ～。



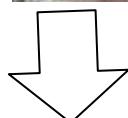
森の入り口に竹で足場が・・・

最初は、こわごわ歩いていた子どもたちも、だんだん目がきらきら☆
最後には、とーっても立派なツリーハウスが完成しました。

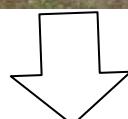
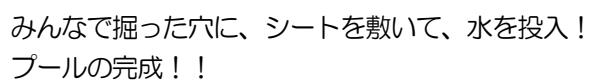


森の中の秘密基地♪

ダンボールを抱えてこそそやってるなあ～と思ったら・・・
こんなに素敵なものを作ったのね。



大人も子どもも、おっと、こんな小さい子まで穴を掘る掘る。スコップをもって掘る手つきも、けっこうサマになってる！！



泳ぐこともできるぞ！
飛び込むぞう！
水遊びは理屈抜きで楽し
そう。

子どもたちの感想



わくわくプレーパーク

～子どもと大人の冒険遊び場～

- 主催者名：福小まちづくりの会
- 参加費：無料
- 対象年齢：0歳～何歳でも
- 駐輪場：公園の中
- 開催日時：月1回土曜日（8月除く）
- 場所：福津市昭和公園
- HP：<http://wagamachi.city.fukutsu.lg.jp/>
(ふくまをクリック)



● まちづくりからスタート

福津市には各小学校区に「まちづくりの会」が設置されています。その組織の中にはさまざまな部会があり、自分たちの地域を自らの手で暮らしやすく、住みやすいまちにしようと活動を行っています。

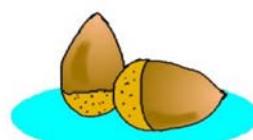
2003年12月、福小まちづくりの会「子育て環境事業部」は、プレーパークに関する3回の連続講座（ワークショップ）を行いました。地域の中に子どもが自由に集まり、のびのびと遊べる場所をつくりたいという思いが高まり、回覧板やチラシ等で福間小学校の人々に呼びかけての開催でした。この講座でプレーパークについての学習を深めた地域の人たちの手で、2004年2月から「わくわくプレーパーク」はスタートしました。

● プレーパーク当日の様子

離れたところにある倉庫から、トラック2台分の荷物が運ばれてきます。テント、テーブル、ロープ、工具等々、実にさまざまなもののが荷台にキッチャリ詰まっています。それをスタッフが手際よく下ろし、協力しながら遊び場を作っていきます。



取材した日は荷物に加えてトラック1台分の砂が運ばれてきました。トラックの荷台が上がり、砂がザアーッと下ろされると、とたんに子どもたちが集まってきました。出来たばかりの砂の山をしばらくじいーっと見ていた子どもたち。まず1人がのぼると、次から次へとみんながのぼりだし、あっという間にのぼっては飛び降りるの繰り返し。小さい子はシャベルで掘ったり、みんな砂まみれになって楽しそうに遊んでいました。





ダンボールも贅沢なほどたくさん置かれていました。電気屋さんからもらってくるというだけあって、冷蔵庫用など大きなものがたくさん。これは高学年の子どもたちに大人気です。好きなだけ持って行き、あちこちで基地のような家づくりが始まりました。公園の隅の植え込みに作る子もいれば、ジャングルジムの上に作る子も。驚いたのは、プレーパークで用意しているダンボールカッターを手に、実際に器用にダンボールを切って窓などを作っていること。1つの家を何人かで協力し、工夫しながら思い通りのものを作り上げていく様子は、見ていたい感心することだらけでした。



● 食べる楽しみ



火おこしが始まりました。炭火をおこすのはなかなか大変です。新聞紙を焚きつけ

にしてうちわで扇ぎ続け、ようやく炭に火がつきました。この火を使って、いろんなものを焼いて食べます。参加者は家から焼いて食べたいものを各自持ち寄っているのです。



じっくりと焼けるのを待つ竹パンや、参加者が持ち寄った具で作られる豚汁も大好評です。思い思いの場所で食事を共にしながらの交流は、子どもにも大人にもなごやかな時間をもたらしてくれます。

● プレーパークを支える人たち

<コアスタッフ>

コアで動いているスタッフは8人程度。自分自身の子育てを通して、さまざまな活動に関わってきた方々が、各自の活動を通してつながり、このプレーパークのスタッフになっています。皆さん子どもを持つ母親であることから、自分自身が地域の中で子どもを遊ばせるのに困った経験を持ち、プレーパークの必要性を、体験を通して感じています。個々の能力も高く、さまざまな分野にわたって活躍されている方々が、自分の持ち味を活かしてプレーパークに関わっていることが、わくわくプレーパークの活動をよりいっそう豊かにしているように思います。



<大学生>

ここには、スタッフとつながりのある福岡教育大学の学生がお手伝いに入っています。年の近い大学生は子どもたちに大人気。やさしく相手をしてくれる女子学生、体をはってダイナミックに遊んでくれる男子学生。将来の教育者を目指す彼らにとって、この場は生身の子どもたちと関わり、書籍では学べないことを学ぶ貴重な体験となっているようです。さらに、子どもだけでなく、この場に来る地域の年長者や親世代との交流も、学生さんにとってはかけがえのないものになっています。



この日で2回目という女子学生と、彼女に誘われてはじめて来たという2人。幼児教育を学ぶ彼女たちの口からは「めっちゃ楽しい。」「子どもが可愛い。」という言葉が何度も聞かれました。

<自治区会区長>

子どもの遊び場づくりに关心を持ち、わくわくプレーパークに協力を惜しまない自治区会区長さんの存在は大きなものがあります。区長さんは「福小まちづくりの会」の会長でもあり、この日も子どもたちが遊び姿を温かく見守りながら工作など子どもの相手をしていました。「自分たちの小さい頃はいろんなものを作って遊んでいた。今の子どもたちにもその楽しさを味わわせてやれるよう、気長に取り組みたい。」とおっしゃる区長さんは「もう少しお父さんの参加があればいいのだが。」とも。

区長さんはからいで、この日嬉しい一報が飛び込んできました。公園に隣接する民家の敷地内にプレーパークのための倉庫

を設置してもよいとのこと。もしもここに倉庫ができたなら、毎回離れたところにある倉庫からトラックで運んでいた荷物を、すぐに出し入れできるようになります。区長さんが直々にそのお宅にお話に行ってくださったおかげで実現しそうなこの知らせ。地域の協力体制の確固たるものを感じたひとまでした。

そして後日・・・



● キーパーソン

わくわくプレーパーク代表の佐伯さんは「地域の人が関わってくれるのが、ここの良さです。地域ぐるみで活動を支援し、予算措置もあるので非常にありがたい。ここは子どもたちと同様に大人にとっても居場所なんです。子どもにとっては楽しく遊べる冒険遊び場、そういう場所を作り上げていくことが、大人にとっては冒険そのものなんですね。」と熱く語ってくれました。彼

女は子ども、環境、地域をキーワードにした活動に幅広く関わるエネルギーッシュな人で、「この場があるのは子どもたちへの思いをひとつにする人のつながり、みんなの力」だと言います。

自らアクションをおこし、子どもの豊かな育ちを心から願う人たちと手を携えて活動を推進し、その人の輪をどんどん広げていく佐伯さんの熱意、パワー。彼女のすごさは、輪に入っていく人が単なるお手伝いではなく、そこに居場所を見つけて当事者として主体的に動くようにしてしまうこともあります。のために彼女は関わる人とのコミュニケーションを大事にし、声をかけ、適切に人と人、人と活動をつないでいるのです。

立場が違う人ともキチンと話し合いをして協働ができる人としての幅広さ、高いコーディネート能力を持ったキーパーソンの存在が、地域を動かしていくには大変重要な役割を果たすということを、わくわくプレーパークの活動を見て実感させられました。

● 夢は常設に

プレーパークという「場」を地域のたくさんの大人が知恵を出し、力を合わせて作り上げていく、その活動を通じて人が豊かにつながり、地域が良くなり、活性化する。そこで日々育つ子どもたちは遊びを通じて多くのことを学び、世代を超えた人間関係を築き、すこやかに育っていく。

このプレーパークを日常のものにしたいというのが、佐伯さんをはじめ、関わるすべての人の願いです。のために、クリアしなければならない問題はたくさんあるようですが、プレーパークをゼロから立ち上げ、着実に地域になくてはならない存在にまで作り上げてきた皆さんの力があれば、必ずや常設のプレーパークは実現することでしょう。どんな冒険を経て、新たなプレーパークが誕生するのかが楽しみです。

公園プレーパーク

～いつもと違ういつもの公園～

- 仕掛け人：子育て応援BOOK 冊子づくり委員会
- 開催日時：2006年8月25日（金）10:30～14:30
- 開催場所：筑紫野市 弥生の杜・遊ゆう公園
- 天 気：快晴（最高気温 36℃）
- 参 加 者：子ども（0歳～小学生高学年）約60人、大人約20人

● 素人たちの無謀な挑戦

プレーパークといえば、野性味あふれた環境で開催するというイメージが強かったのですが、今回は、街中の普通の公園に一日仕掛けをしてプレーパークを試みました。焚き火厳禁、水もたくさん使えない、仕掛けも制限される公共の場所での開催。しかも、メンバーの中に、プレーリーダーは1人だけという状況。恐れ知らずの素人たちの無謀な挑戦は、どのように展開したのでしょうか？



● 酷暑の中で・・・

「暑さ寒さも彼岸まで」と言うけれど、朝からうだるような暑さ。それでも、会場のある公園へ行くと、そこには感動的なくらいの大勢の子どもたちと大人が集まって遊んでいました。みんな近所の子どもたち。福岡市のベッドタウンと言われるこのまち

では、子どもの数が年々増加しているそうです。平日の夕方は100人以上の子どもたちが、ワァワァ走り回って遊ぶという話は、過疎地に住む私には想像できません。事前に何度も聞いていたけれど、全く日陰がない広々とした公園。東屋がボツンと両端に2箇所だけ。まるで、大海原に浮かぶ無人島のようです。日陰でもかなり暑く、「厳しいなあ…」というのが、赤ちゃん連れの私の正直な感想でした。



小学生の息子たちが子どもたちの輪の中に入っていくのを見ながら、早速、東屋にレジャーシートを敷いていると、ずっと赤ちゃんを抱いてベンチに座っていたママが「そこ、いいですか？」と尋ねてきました。「どうぞ、どうぞ」と招き入れ、見知らぬママとの井戸端会議が始まりました。赤ちゃんたちも、シートの上でノビノビと転がることができて楽しそうです。一方、大き

な子どもたちは、とにかく元気。殺人的な日差しの中で、これでもか！というくらい遊びこんでいました。

● 準備した「あそび」

今回、準備したものは、水鉄砲、ベーゴマ、シャボン玉、ゴムとびなど。全部、地元の方たちが準備してくれました。みんなベーゴマの回し方を知らないので、プレーリーダーに教えてもらいます。



ベーゴマにヒモを巻き付ける作業はとても難しく、大人でも思うようにいきません。「このコマ、巻きにくい！」とベーゴマのせいにする子もいます。投げ出すかな？と思って眺めていたら、誰かの「お、回った！」と叫ぶ声に、再び真剣に巻き始めました。ベーブレードのように、機械にセッティングして簡単には回せるものではありません。最初から最後まで緻密な手作業を要するのがベーゴマです。だから、ちゃんと巻けて、コマが回った瞬間の達成感は、とてもなく大きいのです。最初は、何気なく付き合っていた母親たちも、次第に熱心になって、「チッチのチー」と回し始めます。「おお、すげえっ！」と子どもたちの歓声が晴れわたった空に響きわたります。

小さな子どもたちは、シャボン玉コーナーで遊んでいます。骨組みだけのうちわを、洗い桶や発泡トレイに入れた液に浸して、ゆっくり振り回すと、小さなシャボン玉がたくさん飛び出します。欲張って走ったり、勢いよく振り回したりしても、シャボン玉

は飛びません。子どもたちは、何度も失敗や成功を繰り返しながら、ちょうど良い「案配」を学びます。



なんと言っても一番人気は水鉄砲。公園の水飲み場の手洗い用蛇口の栓が止めてあるので、隣の建物からバケツに水を汲みできます。たった一杯のバケツの水でも、水鉄砲遊びには充分です。水が足りなくなると、子どもたちはペットボトルに水を汲んで来て足していました。「ママに向かないで！」と叱られ、排水溝の中を撃つ子。仲間と刑事ごっこ？をする子どもたち。うまく遊具を使って相手の攻撃を避けたり、今度は走り出て撃ってみたり。これまた、楽しそうな黄色い声が響いていました。



「昔は、もっと上手に飛べたのに…」と、ゴムとび遊びにハマる母親たちもいます。華麗な技が次々に披露されます。ゴムとびは初めての子どもたちですが、テレビ番組の影響で、いろんな跳び方を知っています。初めてなのに、いろんな技に挑戦したり、オリジナルな跳び方を開発したり。小さな

子ども、上手に跳べると、みんなで拍手。



● 小さなコミュニティ

やがて、正午。ほとんどの親子は、お昼ご飯を食べに帰っていました。お弁当を持参した親子だけは残っていましたが、次第に気温が上昇。気分が悪くなって、座り込む人も出てきました。日陰にいると、一陣の小さな風さえ、ありがたい気持ちになります。「夏は暑かったんだなあ」としみじみ思います。冷房の効いた建物の中では、この日陰の風の心地よさを感じることはできません。真夏の炎天下、避難所的な東屋にみんなが集まりランチタイム。お弁当を忘れた親子に、みんながおにぎりやパンを、お裾分けしてくれます。いつの間にか、東屋は小さなコミュニティとなっていました。今日会ったばかりなのに、子育ての苦労を共有して盛り上がる母親たち。初めて来た公園なのに、いつの間にか地元の子どもたちと仲間になって走り回るわが子たち。この瞬間は、子どもも大人も、親しみに溢れた優しい時間を共有していました。

● まとめ

「今日の会費はいくらですか?」と尋ねる母親がいました。「会費なんて要りませんよ」と答えつつも、水も安全も、そして「遊び」までもが「有料化」してきたのかな?と、ふと疑問に思いました。メンバーが持参した梨を、公園にいる子どもたちに剥いてあげていると、当然のように両手に一個

ずつ握って、お礼も言わずに立ち去ろうとする子どもがいました。彼より幼い子どもたちが大勢並んで待っているというのに。思わず「1人一個まで! それから、お礼くらい言おうね」と思わず注意してしまいました。子どもは、もてなされて当然という風潮があります。しかし、この日のために、何度も下見して、あちこちから遊び道具をかき集めて、持参してくれた大人たちがいます。お金を払ったのだから、もてなされて当然と考えるような商業化したシステムでは、このプレーパークは成り立ちません。子どもたちも、準備から撤収まで責任を持って関わり、できる範囲でお互い協力するから、プレーパークでは、遠慮なしに思い切って遊べるんじゃないかなと思います。

今回は、真夏の昼間というかなり厳しい条件のもと開催しましたが、本来なら、過ごしやすい季節か、涼しくなる夕方からの開催の方が楽しかったと思います。実際、撤収作業が完了した4時には、常連の子どもたちが自転車で遊びに来していました。

プレーパークで「火」を使うことを知っている子どもは、「今日は、焚き火が無いから、プレーパークじゃない」と不満げでした。確かに、公園では、焚き火やバーベキューは無理です。遊具にロープを張るのも無理です。しかし、いろんな「無理」を強いられた環境でも、そこに、わずかな「遊び道具」を持ち込むことで、みんなが集団となって「遊び」を共有し、子どもも大人も、同じ「遊び仲間」になれます。そしてその「遊び」は、関わる仲間が多いほど、限りなくひろがることを、今回の公園プレーパークで体感しました。



2-10

大野城プレーパーク

～常設の夢をめざして～

● 大野城市にプレーパークを

平成14年の春、職場のスタッフ6人と、東京の子育て支援の現場と羽根木プレーパークの視察を行ったのですが、実際にプレーパークを見たことで、大野城にプレーパークを作ろう！と、全員の気持ちが一致しました。

● 夢の実現へ

平成19年度に完成予定の「大野城市南大利土地区画整理事業内（仮称）」の一角にある「日の浦公園」に、プレーパークの常設を目指し、自然環境を活かした遊び場づくりに取り組んでいます。常設までに、不定期ですが一日プレーパーク（冒険遊び場）を開催してきました。現在、開催を楽しみにしてくださっている方や準備や後片付けまで手伝ってくださる方が増えています。

● 活動について

平成16年度に、大野城市まちづくり助成金を頂き、1年目は市民から協力者を募り、世話人会を設立しました。定期的にワークショップの開催と近隣プレーパークの視察などを行なってきました。2年目には、実際に「1日プレーパーク」を開催し、今後の課題やプレーパークについて、より多くの方に理解してもらえるように広報活動をしてきました。3年目である今年度は、「1日プレーパーク」の開催やリーダー研修、また今後に向けて行政にさまざまな働きかけを行っています。

● 今後の課題

3年間活動してきましたが、プレーパークの認知度は低く、まだまだ広報活動をしていかなければならないと感じています。また、将来的には、市の常設プレーパークを目指していくためにも、行政や近隣の学校、地域住民とも協力しあえるような関係づくりも必要です。課題は山積みですが、これからも子どもたちが自由に楽しむ体験遊びの環境づくりを目指していきたいと思っています。

● 平成18年の活動

- | | |
|-----------|---------------------------------------------|
| 3月 5日（日） | 一日プレーパーク
「火を使おう」 |
| 5月 28日（日） | 一日プレーパーク
「遊ぶ！」 |
| 6月 10日（土） | 場内整備ボランティア活動 |
| 9月 9日（土） | 親子で学ぼう！救急法 |
| 9月 26日（火） | 世話人会 |
| 10月 1日（日） | メールマガジン
「プレプレ★GOGO」
発信開始 |
| 11月 4日（土） | 天野秀昭氏講演会
(冒険遊び場づくり協会) |
| 11月 5日（日） | 一日プレーパーク
(国分寺市プレーステーション
プレーリーダーの青木穂氏) |

■ 情報提供：大野城プレーパークの会
(NPO 法人チャイルドケアセンター大野城内)

<http://npo-ccc.net/>



会議の様子



大きな泥団子を作ったよ！





3

はじめてみよう！プレーパーク ～土・水・木・火を使ったメニュー編～



● プレーパーク はじめのいっぽ

～まずは外に出てみよう～

子どもがまだ小さい頃、ベビーカーで散歩したり、砂場で遊んだりしたことがあるかもしれません。子どもがだんだん大きくなってくると、子どもと一緒に遊ぶこと、そして、外に出かけることが減ってくるようです。「プレーパーク」。難しいことは考えないで、子どもと外に出てみませんか。

遊びが広がる ヒント

● 土とあそぼう



土や砂は子どもたちが一番はじめにふれる自然の遊び相手。これに水さえあれば、泥遊び、穴掘り、川や池作り、泥団子作りなど、何通りも遊べますが、遊びを広げる脇役にこんなものはいかがでしょう。

【スコップ】

掘れる場所なら、子どもはどこまでも掘っていきます。自分がすっぽり入るくらい深く掘った小学生もいるほど。

【廃材、廃品】

ペットボトル、プリンカップ、発泡トレイ、使わないスプーン、お玉、お皿、鍋など。水遊びにも使えます。

【段ボール】【古布】

「基地づくり」の定番。山滑り、キャタピラーごっこなど、子どもからアイディアが次々に出ます。

● 水とあそぼう



子どもたちは水しぶきを上げて遊ぶのが大好き。もし、たくさんの水が使えないでも、ちょっとした工夫で水を楽しむことができます。

[ホース]

「だめよ！」と叫ぶ前に子どもに持たせてみてください。子どもの目がキラキラします。

[バケツ]

水を運んでよし、手足を洗ってよし、何か浮かべてよし。

[ビニールシート]

かなりの重宝もの。広げれば座れるし、水を張れば「プール」、かければ「テント」、斜面に敷けば「ウォータースライダー」に早変わり。

[水鉄砲]

やってみると、おもしろい！大人もハマります。100円で売っているものから、竹などで手作りしたものまで。

[シャボン玉]

子どもにとても人気。シャボン玉液の作り方は、台所用洗剤に同量の水糊を混ぜ、砂糖水少々を加えて濃度を調整すればできあがりです。ストローだけでなく、骨だけにしたうちわ、クッキーの型など、穴の空いたものをいろいろ使ってみてください。針金ハンガーなどを利用して、大きなシャボン玉を作るときには、針金に包帯などを巻き付けると膜が張りやすくなりますよ。

[ビニールスール][ベビーバス][たらい]

赤ちゃんも水の中に座っているだけで、水の感触を楽しめます。大きなシャボン玉を作るときにも必需品。

● 木とあそぼう



木登りできる木があるといいですね。足がかりがなくて登るのがむずかしそうな木でも、ロープがあれば、いろんなことができますよ。道具を使った木工も、子どもたちは大好き。

[ロープ]

太さ 9 mm×20 メートルのロープが使いやすい。2本の木の間に上下2本のロープを張って、モンキーロープ。等間隔に「結び目」を作れば、1本でもはしご代わりになります。子どもの場合は、手足が引っ掛けやすい「輪」を作るのは避けた方が良さそうです。



[木道具]

かなづち、のこぎり、くぎ抜き、くぎ、ネジなど。使わないときの保管の仕方や返却場所を、子どもにもわかりやすく工夫するといいですよ。

[木切れ]

木造の家を建築中のところに行ってお願いすると、意外と気軽に木切れを分けてもらえますよ。

● 火とあそぼう



火は暖を取るだけでなく、ものづくりの大きな味方。とくに「食」には欠かせません。小さな子どもでも、火の扱い方を体で覚えていきます。

[携帯用コンロ]

なべを使って、豚汁、そうめん、ポップコーン。フライパンを使って、焼きそば、ホットケーキ。外で食べれば普段とは違った味に感じます。

[バーベキューコンロ][七輪]

直火が使えないときにあると便利。高価なお肉でなくても、ウィンナーで充分。火を囲むだけで、ゆったりしたあつたかい気持ちが生まれてくるようです。市販のマシュマロ、クッキーをあぶるのもなかなか美味。

[焚き火][かまど]

もし直火が使える場所なら、落ち葉を集めて焼き芋なんかもいいですよね。水で濡らした新聞紙で芋をくるみ、さらに上からアルミホイルで包めば、蒸し焼き風になります。豪快に芋をそのまま火にいれてもできますよ。消火用の水の準備をお忘れなく！！風の強い日は避けてくださいね。



巻き巻きパン(8個分)のつくり方

(用意するもの)

- 50cmくらいの棒（竹を割ったものでOK） ■バーベキューコンロ、かまど等
- 炭 ■強力粉 300g ■餅粉大さじ1 ■ドライイースト小さじ1
- 塩少々 ■バター大さじ1 ■人肌程度に温めたお湯 100cc
- 人肌程度に温めた牛乳 100cc

※バターや牛乳を入れないときは、サラダ油とお湯で代用できます。

(作り方)

- ① 材料すべてを混ぜ、こねる。
- ② 1つにまとめてテーブルなどに100回くらい打ち付ける。
- ③ 8等分に分け、ラップをかぶせ、30分くらい発酵を待つ。
- ④ 炭火をおこす。
- ⑤ 発酵した生地をヘビ状にして、棒にまきつけて炭火であぶる。
- ⑥ お好みでバター、ジャム、はちみつなどをつけると美味しい。



バウムクーヘンのつくり方

(用意するもの)

- ケーキ用マーガリン 200 g
- 砂糖 1.5 カップ
- 卵 6 個
- 小麦粉 2 カップ

(作り方)

- ① マーガリンを木べらで練る。
- ② 砂糖を少しだけ残して入れる。
- ③ 卵黄だけを加えて混ぜる。
- ④ 卵白に残しておいた砂糖を入れ、角が立つまで泡立てる。
- ⑤ ③に小麦粉を入れて混ぜる。
- ⑥ 卵白を少しずつ入れて切るように混ぜる。
- ⑦ ゆるくしたい時は牛乳を少しずつ入れ、様子を見る。
- ⑧ 竹筒をよく火であぶり、表面の油を落とす。
- ⑨ ⑦の生地を竹の表面に少しずつ塗っていく。
- ⑩ その間、竹筒を回し続ける。
- ⑪ 表面までよく焼ければ出来上がり。



● 懐かしい遊び



自分が子どもの頃、やっていた遊びを思い出してください。真剣にやると、子どもは、あこがれのまなざしで見てくれること、間違いなしです。おにごっこ、かくれんぼ、缶蹴り、だるまさんがころんだ、こおりおに、じゃんけん、ゴムとび、手遊び歌など。

【輪ゴム】

長くつなげてゴムとびができます。高さを競ったり、歌にあわせて跳んだり。

【チョーク】

道路上に描くスリルが、たまりません。もちろん、車からの安全は大人も確認する必要があります。「かかし」や陣地を描くこともできます。場合によっては後で消してくださいね。



● 気持ち=「子どもと一緒にいよう」

プレーパークは、「大人が子どもと遊ばなければいけない」場所ではありません。「子どもと遊ぶこと」が得意な大人は、遊んでもいいところ。「子どもと話すこと」が得意な大人は、おしゃべりしてもいいところ。そして、「食べること」があると誰もが集まりやすい。外だから家事のことも忘れて「ゆったりすること」もできる。まずは「外で子どもと一緒にいることを楽しむこと」からはじめませんか。



4

座談会 子どもにとっての「遊び」とは? ～求められる「遊び場」を考える～



座談会出席者

- 佐伯 美保（わくわくプレーパーク代表）
- 古賀 彩子（福岡プレーパークの会代表）
- 朝比奈 昌二（福岡県立社会教育総合センター社会教育主事）

司会

- 古野 陽一（子ねっと工房代表）

テーマ1 子どもにとっての「遊び」とは？

● 乳児期

古野：子どもの成長に沿って「遊び」や「遊び場」について考えてみたいと思います。まずは乳児期から。

佐伯：乳児にとっての「遊び」は、生きていこうえで必要不可欠なものです。手や足など自分の身体を使って遊ぶ、物に興味を持って遊ぶなど大人の共感を支えにしながら自ら遊んでいくものかなと思います。

古野：生きていること全部が遊びであり、その遊びが生きるための力をつくっているということでしょうか。



古賀：まったくその通りだと思います。生まれて間もない赤ちゃんは、おっぱいやミルクをもらって育ちます。それは、空腹を満たしてくれるものであると同時に、お母さんのぬくもりを感じ

させてくれるものですね。

でも、おっぱいはいつもそばにあるわけではないので、指しやぶりをする。口をはじめ五感を楽しむことがきっと最初の遊び、遊びの原型だと思います。

朝比奈：乳児は、親とのスキンシップから情報をキャッチしているように思います。小さい時のスキンシップでコミュニケーション能力の基礎が出来るのかなと思っています。

古野：乳児期というのは「遊び」と「学び」の間に境目がない、遊びが全て学びですし、それがイコール「生活」なんですね。



● 幼児期

古野：続いて幼児、1歳の後半から小学校に上がるまでの「遊び」についてです。

佐伯：「遊び」を通じて、人との関わり方を身につけ、自分自身を認識していく時期だと思います。遊びの中で、生きる力につながる社会性とか協調性とかを養っていくのではないでしょか。この時期にじっくり、たっぷり遊ぶことが、その子の人生を左右するくらい大事なものかなと思います。



■ 佐伯さん

古野：具体的な遊びには、どんなものがありますか。

佐伯：ひとつは、土や水、草木や虫など自然と関わる遊び。五感を使ってさまざまなものに触れて、世界を広げていくのでは。もうひとつは、子ども同士の関わり遊び。相手がいると思い通りにいかないこともあります。そこで他者に対応していく力を身につけていくんだと思います。「ごっこ遊び」などで思いやりの気持ちや関わる力がはぐくまれるのでは。それと、幼児期は大人の見守りがあるので、大人がどう共感し、子どもたちの遊びにどう関わっていくかが、すごく大きな要素なのでは。そこで子どもの遊びがひろがっていったり、子ども同士の関わりが発展していったりするのではないかでしょうか。

古賀：そうですよね。乳幼児期は親や周囲の大によって全面的に保護されています。大人の保護圏内で遊ぶんです。この時期、周りの大人たちが、どんなふうに接するかが、後にどのような遊びを好むようになるのかと関係があると思います。

古野：幼児期は大人の影響が大きいわけですね。プレーパークでの遊びはどうでしょう？

古賀：乳幼児の遊びの内容は、「土に穴を掘る」「火を見る」「木に登る」「泥の感触を楽しむ」「斜面をのぼる、すべりおりる、かけおりる」「裸足の感覚を体験する」など五感を使った遊びがほとんどです。そしてちょっと大きくなると、高いところからジャンプしてみたり、わざと物を壊したり、いろんなことを試して発見していきます。イメージを広げてくれる絵本や童話などのお話を好むのもこの時期ですね。

朝比奈：今、おふたりのお話を聞いて、なるほどと思ったのですが、遊びを通して、自分なりにこれは危ないなとか、こんなことをやると嫌がられるなとか、少しづつ感覚的にわかってくるんですね。社会性の基礎は、そこで育ってくれるのかと感じました。遊びのルールを守ることは、わがままを自分で抑えることにつながります。幼児期に思いっきり遊んでない子どもたちは、社会性や忍耐力などが未発達のまま学童期を迎えることになりますね。小学校入学後に起こるさまざまな問題の原因の1つは、ここにあるような気がします。



●遊びと遊びじゃないこと

古野：幼児期になると、遊びと遊びじゃないことの区別が、少しずつ出てくるようになります。じゃあ遊びと遊びじゃないものの違いってなに？ということをお話してもらえますか。

佐伯：普段の生活には、自由な遊びとは別に、お手伝いのように、ちょっとがんばってやらなくちゃならないことがありますね。お手伝いをすることで、家族の中でちょっと頼られる存在というふうに自分のことを意識していくことがあります。実生活の中での役割的なものが、遊び以外のものなのでは。



古賀：主体、つまり子どもが、その時の行動をどんなふうに意識しているか、感じているのか、といった心の動きが深く関係していると思います。例えば保育園で機嫌良く滑り台で遊んでいた子どもが、先生から「みんなでおにごっこをしよう！」と誘われて、無理矢理させられたとします。したくないその

子にとって、おにごっこは遊びといえるでしょうか。強制されていやいやしなければならないことは、それがたとえ一般的に「遊び」といわれるものであっても、本人にとってはけっして「遊び」ではないはずです。また、数字が好きな子が、誰に強制されることもなく、数の問題を解くのを楽しんでいたとします。この場合は、遊びと言えるでしょう。



古野：楽しい、やりたい、おもしろい、「自発的にやること」というのが、遊びの時間なんですね。やりたくないな、でも後で困るから、という「大人の判断」でやっている部分が遊びじゃない時間になっているのかなと思います。

佐伯：そういう意味では幼児の普段の日常生活の中でお手伝いの時間も少なくなっているし、従来よりも自発的に遊ぶ時間も短くなっていると感じます。テレビなどのメディアの影響もあって、ごっこ遊びとかに入る前に、受動的に見せられたり、遊ばされたりという、大人が与える遊びが増え、自ら働きかけて遊ぶ時間が短くなっているのではないかでしょうか。今の子どもたちを見ているとそんなことを感じます。

朝比奈：自発的にやりたいことをやるとい

うのが、遊びなんですがね…。

佐伯：子どものまわりの環境というのが子どもの遊び心を刺激していくのだと思うのですが、今の子どもの生活環境には「遊ばされる」おもちゃ、「見せられる」メディアがあふれています。自分が働きかけて変わっていくものより、自動的に電気で動くおもちゃなどが子どもたちの周りに多いと感じます。今は、遊びの幅が狭められている実状があるように思います。

● 学童前期

古野：幼児後期になると、だんだん遊ばされているという時間が増えるのかもしれません。そこらへんを含みながら学童前期小学1～3年生までを考えてみましょうか。

古賀：大人に縛られず自由に遊びたくなる時期です。身体的にもそれなりにしっかりして、子どもたちは親の手のうちから抜け出し、外で遊ぶことが多くなります。そして、ドッヂボール、キックベース、サッカー、おにごっこなど友だちと一緒に遊ぶことが多くなります。また、いたずらや悪さをしたくなるのもこの時期で、蟻をつぶしてみたり、わざと看板めがけて石を投げたり、怖いことやスリルがあることを楽しむですね。



朝比奈：わが家の子どものことを思い出してみると、親のことを気にしながらも、親の見えないところに行ったり、そういうことはありました。小学生になっ

てだんだん友だちが遊びに来るようになります。

古賀：自立に向けて一歩を踏み出す時期ですね。

古野：親から離れていく時期なのかな。

朝比奈：親から離れたいけど離れられない時期のような気がします。

佐伯：いろんなタイプの子が、群れて遊ぶ時期ですね。一緒に悪さをしたり、けんかしたりを、たくさん体験していくことが高学年での力になるのだと思います。大切な時期ですが、現実的にはここが厳しくなっていますね。

古野：と言いますと？

佐伯：子どもの生活の中で電子映像メディアとの関わりが大きくなっています。外で群れて遊ぶというよりは室内で、少人数でゲームなどのメディアに向き合って遊ぶというようにゆがみが生じてきているのではないかでしょうか。本来ならばいろんな子どもと群れて遊ぶ時期であるにもかかわらず、気の合う少人数で遊ぶ。高学年の遊びと一見似たような傾向がもう既にこの時期にあるのでは。遊びの質が変わってきていることが、いろんな友だちと遊ぶ体験の少なさとして今出てきているからこそ、自由な遊び場づくりが大切なんだと思います。

古野：群れ遊びがなくなっている、ということでしょうか。

古賀：十数年前から、子どもたちの多くが塾などに通うようになり、かつて地域に見られた群れ遊びは急速に壊れてしまいました。「遊ぶ時間がない、遊ぶ場所がない、遊ぶ友だちがいない」と盛んに言われるようになったのもこの頃からで、少子化も重なって、子どもたちはなかなか思うように遊ぶことができなくなりました。それと並行して、メディアが浸透していき、家での電子ゲーム、テレビ、漫画が、遊びの主流

になってしまったのではないでしょか。でも電子ゲームが大好きな今の子どもたちでも、話してみると「友だちと知らないところへ探検したり、思いっきり遊びたい」って言います。子どもたちはやっぱり、外で思いっきり遊ぶことを望んでいるんだと思います。



● 学童後期

古野：年が上がってくるごとに暗い雰囲気になってきていますが（笑）、学童後期にいきましょう。小学校4～6年頃の思春期にかかり始めた頃の遊びについて。

古賀：低学年を卒業して高学年を迎えた子どもは親の目の届かないところで遊ぶことがあります。親にだめだといわれても、こっそり自転車で遠出してみたり、危ないことに挑戦したりというような行動を自ら好んで試してみる時期。好奇心や冒険心に駆り立てられる時期ではないでしょうか。

佐伯：気の合った友だちと家の周りから、かなり遠くの池に魚釣りに行ったり近くの山に登って行ったり、遊びのエリアが広がってくる時期じゃないかなと思います。その遊びを一緒にしてくれる気の合う友だちがいて、遊びを広げていける時期ではないでしょうか。

古野：高学年になると気の合う仲間がはつきりしてきて、仲間と一緒に社会や生活圏を広げていく時期ですよね。



朝比奈：友だち関係が深くなてくる時期だと思います。その中でよりよい人間関係を築いていくという意味でのコミュニケーション能力が発達してくるのではないでしょうか。小さい頃に群れて遊んだ子どもはこの時期もうまくやつていけるような気がします。しかし、群れて遊んだ経験のない子どもは、コミュニケーション能力が未熟で、新しい関係づくりが苦手だと思います。遊んだ子は次から次へと友だちが変わっていましたとしても、良い人間関係をつくっていくし、たとえケンカしても、上手に修復できる力があるように思います。けれども、遊んでない子はそこが苦手なので、友だちとのトラブルをうまく修復できず、また、新しい友だちへの切り替えもできず、閉じこもってしまうことが多いのではないかでしょうか。



■朝比奈さん

古野：この時期の現状は？高学年期の遊びというのはどういうふうになっているのでしょうか。

佐伯：うまくギャングエイジを乗り切ってここに至ってほしいけれども、上手に関係を作れなくて孤立していったり、学校に行けなくなったりということも起きています。一方で、遊びのエリアを広げていくことによって社会を広げていく時期もあるにもかかわらず、一部の子どもたちは多様なメディアにはまってきている状況もあります。高学年になるとテレビやゲームだけではなく、パソコンやケータイを持っている子もいて、持っている者同士の限られた関係の中で室内型の遊びとなり、遊びのエリアが外に広がって行くのとは逆の形になっているかなと感じています。

古賀：高学年になると特に塾や習い事がある、放課後、子どもたち同士で遊ぶことは非常に少なくなっているのが現状だと思います。下の子が5年生ですが、8割の子が塾に行っていまし、そうじゃない子はその他の習い事やスポーツクラブに入っているので子どもたちだけの純粋な群れ遊びというのは難しい。しかし、数人規模ですが、こんな環境の中でも、住宅街の片隅にこっそり秘密基地を作ったり、放課後ぎりぎりまで学校に残って遊んだり、マンションでおにごっこをしたり、釣りに出かけたり、自分たちだけで遊ぶことができる子どもたちもいます。遊び心が旺盛な子どもは、どこにでも「遊び」を創造できるのです。



古野：うちの子の学校では塾は少ないが、ほとんどスポーツ少年団に入っていますよ。ソフトとサッカーで男児の8割以上は入ってますね。

朝比奈：うちの娘は小学校6年生ですが、昔と比べて学校の時間が長くなっているように感じます。帰ってくるのはだいたい夕方5時前頃。それから遊べといっても、時間はないし、いろんな事件が起こっているので安全に安心して遊び場所がない状況なのです。どこで遊びのかなと逆に心配になります。



■古野さん

● 安心・安全と遊び

古野：もう一つ聞いたかったことがそこでです。最近「安心・安全」ということが大きなテーマになってきてますが、実は大人との関係の問題なのではないかと思っているんです。昔が今と比べて犯罪が少なかったかというと決してそうではなかった訳だし、子どもに対する事件も多数あったんですよね。昔も、安心・安全ではなかった。今、そこがクローズアップされるというのはひょっとすると大人と子どもの関係に何かあるのでは、と思っているのです。

古賀：親からすれば、学校から帰った子どもが家でゴロゴロしてゲームばかりしているのを見ると、外で元気に遊んでほしいと思うでしょう。でも、子どもを狙った犯罪が頻繁に起きると、家に

居てもらったほうが親としては安心できる側面もある。そうすると、なんとか我が家子を安心の中でみんなと遊ばせたくて、子どもの遊び場活動を始めるお母さんたちも多いのです。



佐伯：昔、子どもが隙間を見つけて遊んでいる時代には、地域の中で大人同士のつながりもあって、子どもの姿が目の端に入っているという状態でした。たいていのことは大目に見て、本当に危険な時には注意してくれる人がいたから、逆に思いっきり冒険的な遊びができていました。今は、地域の中での人のつながりが薄くなり、声をかける代わりに、立て看板で子どもの遊びを制限することが増えていますね。子どもたちの自由な遊びをおおらかに見守っていく地域の力がすごく弱くなっているように思います。それどころか、大人は犯罪に及ぶかもしれない危険な存在です。だから、人工的ではあるけれど登下校の見守り隊のように、いざという時には一声かけるといったつながりを再生していこうとしている時期ではないかと思います。登下校の安全・安心は大切な問題です。同様に遊び環境をつくるところでは、子どもが冒険心を発揮して自由に遊べるよう、ゆるやかな見守りができる大人同士のつながりをつくっていく事が必要だと思います。

古野：この時期の子ども遊びというと、「秘密をつくる」ことがとても大事なことがありますと感じています。大人が知らない自分だけの秘密というのが遊びのキーワードになる。そのポイントを古賀さんからお願いします。

古賀：秘密を持つということは、親に闇与されない自分の世界を持つということ

で、それは子どもの自立の表れだと思います。本来この時期の子どもたちは、自立に向かっているがゆえに、好んで親や大人の目の届かない場所で遊ぶんです。しかし最近では、多くの子どもたちはこうした経験ができていないため、自立どころか幼児期を引きずったまま体だけ大きくなってしまった子どもたちも目立ってきてます。



● 中学生期・思春期

古野：中学生、高校生の思春期にとっての遊びについて考えてみたいと思います。朝比奈さん、いかがですか。

朝比奈：思春期はみんなが悩みや不安を抱えている時期なので、同じ悩みを持っているという意味でも友だちの存在はより一層大きくなってくると思います。遊びの範囲や分野もさまざまになるでしょうが、ただ単に遊ぶというよりは、友だちの話を聞いたり、自分のことを聞いてもらったりと、不安や悩みを共有したり、解消しあったりすることがこの時期の遊びじゃないかと思います。その関係の中で、自分の存在や他との関わりを確認する中で、自尊感情も発達してくると思います。更にその関係の中に、自分より年上で目標となる存在がいたら、遊びの中でセルフイメージの高揚が図られてくるのではないかと思う。

佐伯：やりたい遊びを作りあっていける時期かなと思う。例えば、子どもたちがやりたいと思うことを一緒に計画したり、準備したりして、仲間とつくりあっていく時期が思春期になると思いますね。

古賀：乳幼児期からこの時期まで、どのような遊びを経験してきたかで違いがあると思います。遊ぶというより、将来のことや、社会のことに関心を寄せる時期で、友だちとの関係も友情や恋愛というかたちで意識するようになり、他人とどういう人間関係を結ぶかをはじめに模索する時期だと思います。仲のいい友だちといふと、特別なことをしなくとも一緒にいるだけで楽しい。飽きることなくおしゃべりをして、ふざけ合う。何をしても楽しい。こんな関係そのものが、この時期の遊びといえるのではないでしょうか。

古野：「遊び」が大人のいう遊びとほとんど同じになってくる時期でしょうね。映画に行ったり、遊園地に行ったりということが遊びでしょう。ただ、遊びが「主体的に楽しむもの」ということであれば、「趣味」と呼ばれるものや、青春をかけていることが、きっとすると学童期、幼児期の遊びと同じなんじゃないかなあ。遊びという言葉のカテゴリーが変わってくるのかも知れませんね。



テーマ2 プレーパークって何なのか？

● プレーパークの歴史

古野：次に、「プレーパーク」って何だろうということを考えていきたいと思います。一般的にモデルといわれる東京都世田谷羽根木のプレーパークの事例などから、古賀さんお話をいただけますか。

古賀：プレーパークというのは公園にありがちな禁止事項を排除して子どもたちが主体的に自由に遊べる場所で「冒険遊び場」とも言います。今やすっかり失われてしまった子どもたちが自由に遊べる環境。そんな環境を子どもたちに返していく活動を私たちはプレーパーク（冒険遊び場）と呼んでいます。その源流は第二次世界大戦中のデンマークにさかのぼります。ある造園家が、子どもたちが整備された公園より空き地や資材置き場で楽しそうに遊ぶことに気づきました。手つかずには遊び場にガラクタや工具など子どもの遊び心を刺激するものを置くだけで、子どもが創意工夫を發揮して遊ぶ場になるのではと考え、建築家などと協力して1943年、コペンハーゲン市郊外に「廃材遊び場」を作りました。これが大成功し、その考えが国内はもとより、他の国々でも歓迎されてヨーロッパ各地に広がっていったのです。日本では1979年に初の常設遊び場である「羽根木プレーパーク」が誕生しました。以来、東京都世田谷区を中心に多くの遊び場がつくられ、現在全国で200近くの団体が、プレーパーク（冒険遊び場）づくりに取り組んでいます。

● 禁止事項は本当にはないのか？

古野：禁止事項がないということですが、実

際はどうなんでしょう？まずは、どのくらいの火を焚いていいのですか？

古賀：それは現場によって異なります。福岡では現在6カ所で毎月プレーパーク活動が行われていますが、ドラム缶や七輪を使って火を焚いています。ただ、佐伯さんのところ（福津のわくわくプレーパーク）は直火に近い状態で焚き火をされていますね。

古野：どのくらい木を切ったり、土を掘ったりしていいんですか？

古賀：これも現場の環境によって条件が違いますから、一概にはいえません。子どもたちは、置かれてる廃材などを使って遊ぶことがほとんどなので、生木を切ったりすることはめったにありません。土に関しては子どもが気のすむまとでもいいましょうか、自由にやっています。

古野：逆にどれくらいのものを作つていいのですか？例えば秘密基地など、どのくらい片付けなくていいのでしょうか。

古賀：常設と常設でない現場で大きく違います。常設であれば何日でも作ったものを子どもの考え方置いておくことができます。常設でない1日プレーパークだったら、場所の管理上、その日中に撤去しなければいけません。



古野：子ども同士のけんかはどこまで禁止するんでしょう？

古賀：プレーパークは「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに掲げており、禁止事項はありません。ですから、けんかの仲裁にはいることはあっても、禁止することはできません。しかし、自由な遊び場だからといって何でも子どもの言うとおりにするということではありません。子どもがやっていること、持ちかけられたことで気になることは相手から話を聞いて、できる限り真意を受け止めたうえで、自分の考えを理由とともに伝えています。子どもにとっては大人にしっかりと向き合ってもらえたことが信頼につながるようです。プレーパークで育った若者から「自分の問いかけに対して、ルールや常識だからという答えではなく、自分の言葉で返してくれるから、プレーパークの大人は信頼できる。」という発言がありました。プレーパークでは、子どものやっていることを頭ごなしに否定するのではなく、一緒に考える姿勢を大切にしています。試行錯誤しながらひとつつの問題を共有すると、年齢に関係なく一体感や仲間意識、信頼関係が生まれます。プレーパークはその上に成り立っています。

古野：ゲームを持ち込んできてもいいんでしょうか？

古賀：「持ってきてはいけない」という禁止事項はないので、これもOKです。でも、ずっとゲームをやる子はいないですよ。



● 福岡のプレーパークでは？

古野：福岡県内で実際に行われているプレーパークの様子はどうでしょう？

佐伯：福津で活動を始める時、「子どもたちが自分の足で歩いて行けて、思いっきり遊べる冒険遊び場にしたい」と考えました。まず小学校区の中をリサーチし、周囲からも分かりやすく、広さもある公園、昭和公園でプレーパークをすることに決めました。公園ですから禁止事項がいっぱいあります。でも、子どもたちが、遊びたい遊びをそこで出来るようにしたいという思いで、開催するたびに使用願いを出して、穴掘りや火を焚くことができるような場にしています。来る人たちが自分を開放し、癒される場が地域に必要だと思うからです。子どもたちにとっては、本来は大人の目が離れているのがいいのでしょうが、ここでは逆に子どもたちが自由にのびのびと遊べるよう、大人がおおらかに見守りをしながら運営しています。また、子どもと大人の中間の世代が、遊びの上で重要な存在だと思うので、福岡教育大の学生などに働きかけて、一緒にやっています。現在、月1回のペースで開催しています。

古野：公園の制約の中で少しでも自由を確保するためには、何が大切なのでしょうか？

佐伯：プレーパークを始めるときに、施設管理課と充分話し合いをしておくことです。土で遊べる、掘って遊べる、水を流して遊べる。木を傷めちゃいけないけど、登ったりできる。火は、子どもの心を癒してくれたり、火の周りには子どもたちや大人たちの交流が生まれたりということがある。「土・水・木・火」を使った遊びにこだわり、自分の責任で自由に遊ぶことを大切にしています。

朝比奈：大人の見守りの中で、子どもの安全を確保できているんですね。安全確保を維持しながらプレーパークを続けていくための大切なものは、いかに本音で子どもに向き合っていけるかなんです。禁止することは簡単ですが、子どもたちと一緒に考えていくプレーパークだったらと願っています。



テーマ3 子どもの遊びを支える大人の価値観

● プレーパークを支えるもの

古野：プレーパークを維持するのに、学校、地域、家庭との連携も大切ですよね。

佐伯：学校との連携は、とても重要ですね。学校で家庭へのプレーパークのお知らせを配らせてもらっています。チラシをお願いするときに先生と遊びの大切さについて話をしたりします。地域へのお知らせは、行政区の回覧板で回してもらっています。子どもが学校へ行っている家庭だけではなく、地域の方々にもお知らせしたいからです。回覧板を見て、毎回遊びに来られる方もいます。



古野：プレーパークが地域にもたらすものとは何でしょうか。

古賀：プレーパークは子どもだけでなく大

人も集める場所です。子どもとの遊びを通じて、年代や立場を超えた地域のコミュニケーションや公園利用（外遊び）の活性化を促します。地域住民のふれあいの場としても有効だと思います。とくに、子育て中の親子の孤立が問題となっている現在、乳幼児を抱える母親にとっては、プレーパークで出会う地域の多様な世代とのふれあいは、親としての交流が広がり、成長できる機会になっています。

朝比奈：学校の理解と住民とのつなぎがあれば、その可能性が広がりますね。「知ってもらうこと」そこからはじめたいと思います。

古賀：そうですね。福岡はプレーパークに関する認知度が低いので、「プレーパーク」って何なのか、どうして今、「プレーパーク」が必要なのか、それを知ってもらうことからですね。本来プレーパークは、地域社会の中にある遊び場なので、プレーパークの活動が徐々に知られるようになると、それを必要とする地域社会の背景や子どもの置かれている環境に関心が高まってくるかもしれません。

佐伯：大人の都合で遊び場があつたり、な

くなったりする状況は悲しいですね。地域の子どもたちが、日常的に遊べる遊び場となるよう、プレーパークを地域に根付かせていきたいと思っています。地域の人たちに必要性を話し、共感者と担い手を増やしていくことが大切だと思います。

古野：連携のポイントは何でしょう。

朝比奈：今、学校は地域の特性を活かしながら、それぞれの特色ある教育を展開する努力をしています。まずは、どんな活動なのかを知らせ、理解してもらえると、大きな力になるでしょうね。

古賀：「遊び観」を共有したいです。

古野：地域の人の「遊び観」を共有するためにはどうしたらいいのでしょうか？

佐伯：地域の人は、「子どもの遊び体験が必要だよね」という点には共感してくれます。でも実際プレーパークづくりに動き始めると、「子どもは子ども同士で勝手に遊ぶ」という体験を持つおじいちゃん、おばあちゃん世代からは、「わざわざ何故大人がかわる必要があるのか？」という疑問を持たれるようです。理解を得るために現状を話し、「子どもが自分の責任で自由に遊べて、大人の見守りがある遊び場を一緒に作りましょう。」とお説明します。しかし、なかなか難しいものもありますね。説明するよりもプレーパークで活き活きと遊んでいる子どもの表情を実際に見てもらうことが一番共有してもらえるんですよ。禁止事項がない遊び場の展開を維持運営していくには遊び観を共有できる大人を増やしていくことと、地域の方々の協力が不可欠です。地域でプレーパークを支える大人の輪を広げていくことが必要だと思います。

古野：やってもらうこと、見てもらうことで、大人が子どもにどう関わるべきなのかを発見してもらうんですね。

古賀：佐伯さんが言われるように「遊び観」

に世代間のギャップがあるので、地域の人たちの理解を得るには、子育てを終えた世代の認識の違いを知り、それを埋めるような働きかけをしていく必要があります。例えば、私たちはワークショップなどを通じて、昔を振り返って自分たちの子ども時代を思い出してもらう取り組みをしています。子どもの頃の「遊びの絵日記」などを書いてもらい、どんな時に、どんな場所で、どんな人と、どんなふうに遊んでいたときが楽しかったかをみんなで話し合います。懐かしい思い出話を共有するうちに「遊び観」は自然に重なっていきます。

●遊びを生み出すもの

古野：今の子どもたちは、遊びを奪われていると言われます。誰が遊びを奪っているのでしょうか？

佐伯：それは大人の価値観からきているのかもしれません。自由な遊びこそ生きていく力、学ぶ力を生み出すものなのに、成果が目に見える記憶学習やスポーツ教室などに価値を認める親が多いと思います。そして、幼児期からの早期教育や、低学年からの塾通いとなり、結果的に大人の価値観が子どもの自由な遊びを奪っているのではないかと思います。

朝比奈：子どもの自発性、能動性の成長を阻害しているのは、大人の関わり方でしょうね。生活体験も含めて言うと、まず大人がきちんと教えて、任せて、そして見守ることが大切なんでしょうね。

佐伯：やはり私も、見守るということだと思います。地域の大人が関わるときには、子どもの遊び心を刺激する環境を用意しておくことに留めてもらっています。あえて未完成なものを置いておくとか。そこで子どもたちは自分でやりたい遊びがやれる。私たちは、「子ど

もと大人の冒険遊び場」と言っています。大人自身も遊びを見つけ、楽しんで、自分たちの居場所にしていいんじゃないでしょうか。

古野：きちんと教えて、まかせて、見守る、そして楽しむですね。では、きちんと教えるとは、どんなことを指すのでしょうか？

佐伯：例えば、工具の使い方。子どもが何かを作つて遊びたくて「使い方を教えて」と言えば、自由に工具を使いこなせるよう、正しい使い方を教えます。その後は見守る。大人が程よい距離を保つことが大切だと思います。子どもが助けを求めてくるまで待っていますよ。



朝比奈：子どもは、やつしたことのないことはできないので、安全管理などを考えたいと思ったのです。どうしたらいいのかわからぬことについては、最初にきちんと教える必要があるということです。

古賀：私は、「遊び」は基本的に自由で自発的なものであり、指導されたり指図されたりしてするものではないと思っています。プレーパーク活動の場合は、



本来の子どもの「遊び」を取り戻すことが目的だから、教育的意図などは前提とされません。子どもたちは楽しいから遊ぶのであって、やりたいことがあれば自ら学びます。教育現場において、教育的意図を伴つた手段として「遊び」を取り上げた場合、少なくとも遊びを遊びとして楽しむことができない子どもが出てくるのではないか。遊びを教育で取り上げる場合の難しさがそこにあると思います。

古野：「遊び」には、意義を求める、大義名分をつくらないということでしょうか。

朝比奈：これまでほとんどの子どもが、自由な「遊び」の中で発達段階ごとに必要な体験をし、大人になっていったのですが、現状を見ると、遊ばなくなった子どもたちへ「遊び」に関して何らかの手を打つ必要があるわけで、その一つの試みが、このプレーパークだと思います。

佐伯：地域で行われている事業には、ほとんどのものに「目的」や「プログラム」がありますよね。プレーパークでは、子どもは目的があつて遊んでいるわけではないと思うんです。子どもが自ら選び取つて、遊んでいる。自ら選び取つて遊べる場、体験できる場、関われるものがあって、子どもの自由度が高い遊び場が、プレーパークだと思います。意義とか大義はあんまり考えていないと思います。遊んでいるうちに、「これができた。自分で結構できるじゃん。面白かった。」という充足感を感じられる場だといいのかなと思っています。



テーマ4 大人はどこで引くべきか ～子どもの主体性を育むために～

● 「遊び場」と「遊ばせ場」

古賀：私たちはいつも、「遊び場」と「遊ばせ場」の違いを考えています。大人は子どもに何かをしてあげなくてはならないと考えてしまう傾向があります。子どもが有意義な時間を過ごせるようになるには、充実したプログラムが必要だとついつい考えてしまします。でも、本当はどうでしょう？楽しく過ごせるプログラムを提供することで、子どもの主体性を摘んでしまってはいないでしまうか。プレーパークでは、大人は子どもがやりたいことを自らやるまで待つことを心がけています。何かをやってみるときに、失敗なく上手にできることよりも、じっくりと納得して思いのまま取りかかることができるこことを大切にしています。大人は、とかく結果として何をつくるかということを求めがちですが、子どもの遊びではその行為自体や過程が大切なのだと思います。プレーパークの大人たちはゆるやかに子どもを見守りながら、子どもが手に負えないことに直面したときは助けられるようにしています。

佐伯：その時々で展開される遊びも違うので、子どもから求められた時の大人の手の出し方引き方はその時々の判断で行なっています。子どもが主体的に、

自由に遊べることがプレーパークの魅力ですから、おおらかに見守ることが基本です。ただ大人が引いてしまって、大人の都合で遊び場がなくなる状況にはしたくないですね。できれば日常的に子どもたちが主体的に、自分の責任で自由に遊べるよう、継続的なプレーパークづくりをしていきたいと思っています。地域の大人たちと必要性を語りあって、共感者を増やし、遊び場に対応できる大人を増やしていくことが大切だと思います。

古賀：子どもにいろんな遊びをさせたくて、子どもたちをリードすることがあります。ただ、それが常となれば、子どもたちはおもしろい遊びができたとしても、大人にすっかり依存的になってしまふ。それでは自分で遊んでいることになりません。だから大人はやはり、出過ぎないように、かまい過ぎないように、心がけることが大切です。子どもの主体性は、させられることではなく、自分の意志で何かをする経験から生まれるものだからです。

朝比奈：活動自体は子どもたちに任せた方がいいですよね。ただ、子どもたちの「安全」を見守るところは引けないとこです。

古野：大人自身も自分の責任で関わるんですね。



テーマ5 遊び場づくりのポイント

● 遊び場づくりのポイントは？

佐伯：子どもの生活圏の中にあること、自分の足で行けることです。

朝比奈：校区の中にあって、気軽に安全・安心できる場ですね。

古賀：「そこに行けば誰かと遊べる」という遊び場の必要性を地域に発信すること。

佐伯：そこでは、子どもと大人の中間の青年、学生が場にいる存在が大きいと思います。

朝比奈：学生にプラスして企業やNPOなどが関わってくると面白いのではないかでしょうか。

古賀：遊びを見守る大人が常駐していること。

佐伯：大人もいろんな世代がいたほうが面白い。おじいちゃん、おばあちゃんなどが集まる場はポイントですね。

古賀：地域の人の目が届くところ。学校の校庭や児童公園を有効に使う。

佐伯：自由に遊べるためにには、一定の空間が必要。これから公園作りには、自然に遊べる素材がほしい。クヌギ、しいなど実のなる木があったらいいかも。

朝比奈：異年齢集団ということを考えると人が集まりやすいところ。駅の近くとかもいいのではないですか。

佐伯：公園を使う場合は、起伏のある公園がいいですね。砂を入れたりして起伏をつけて、環境的に遊び心を刺激する起伏がある環境がいいと思います。みなさんつくりましょう（笑）。

古賀：遊び場はつくって壊してのくり返し。子どもたちと環境の変化を楽しむ。

古野：変えられるって楽しいですね。つくれて壊せることも大切ですね。

みんな：そうそう！

● ベスト・ワン

古野：では、最後にプレーパークに必要なもののベスト・ワンをあげて終わりたいと思います。

古賀：遊び心。

佐伯：遊び場を支える人のつながり。

朝比奈：安全。

古野：ありがとうございました。



5

自然と人との関係がつくる子どもが遊ぶ環境

～まとめにかえて～



自然と人の関係



この冊子づくりの取材を通して、たくさんの子どもの遊び場やプレーパーク実践を見たり体験したりしてきました。最初に活動に参加し始めたときは、多くの時間を空調の整ったビルの一室で仕事をしている私にとって、自然の中で一日を過ごすことに、少し抵抗を感じていました。しかし、そんな私が、子どもとともに、遊び場づくりをしていく中で、土の香り、木々や花々の呼吸、日射しの厳しさや暖かさ、虫たちの鳴き声、鳥のさえずりを身体で感じ、自然の中にいる心地よさを感じていくことができました。「人が豊かに生きるためにには、自然の中に身を置き、自然の息吹を感じ、呼吸を合わせ、共生していくことが必要なんだ」と、身をもって理解した半年間でした。

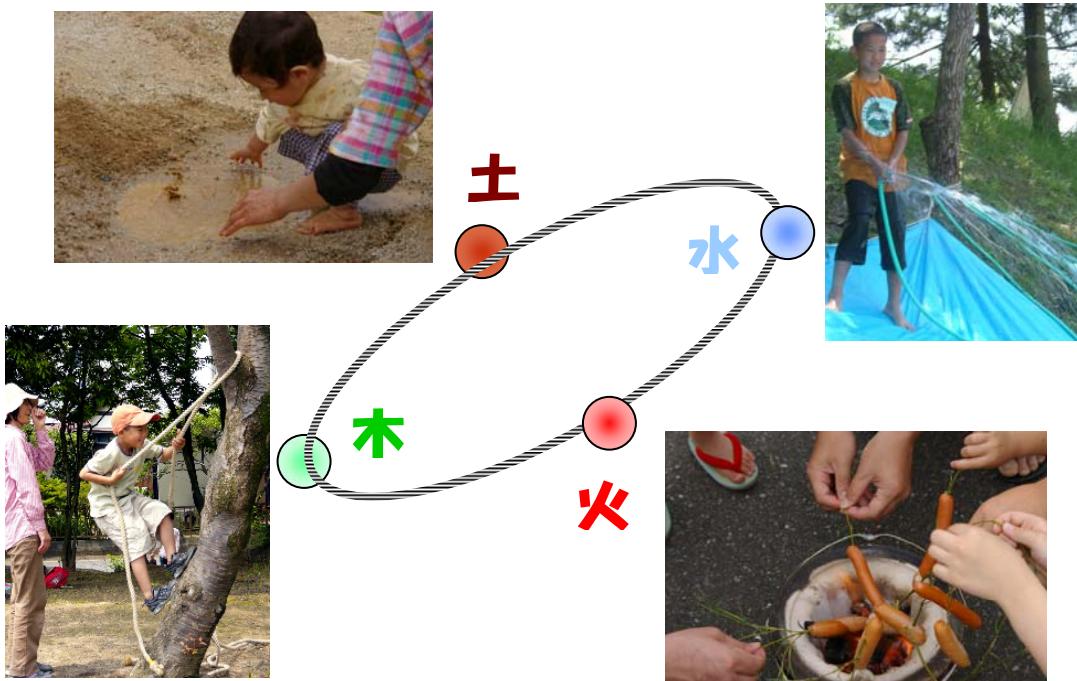
子どもにとっての自然とはどういう意味をもつのでしょうか。春は咲き乱れる花や新緑、冬眠から覚めた虫たちの鳴き声の季節、夏は生き物の繁殖期や水の恵みを感じる季節、秋はさわやかな秋風や実りの季節、冬は雪が降り暖をとる心暖かい季節など、体と心で「季節」を体感していくことによって、自然と子どもとの関係は徐々に深まりを見せます。しかし、快適な居住空間の普及によって、現実の子どもたちは、室内で過ごすこと好み、限られたバーチャル空間でおこなわれるインターネットやゲームに興じている姿が多く見受けられます。子どもからゲーム機を取り上げるだけではなく、限られた遊びのバーチャル空間から、遊びの「はじめのいっぽ」を踏み出す魅力ある場づくりが求められているのです。



五感を使った子どもの遊び

子どもの「遊び」には、いろいろなものがありますが、この冊子ではその中でも外遊びを中心とした子どもの遊び場実践を取り上げてきました。そこには、多様な事例の中にも共通した項目が含まれていることがわかりました。それは、「土（つち）」「水（みず）」「木（き）」「火（ひ）」による五感をフルに使った自然とふれ合う関係の中で展開されている遊びという点です。土を延々と掘り続け、水遊びに夢中になる子ども、木に登って遊ぶ子、くつろぐ子、火の周りに集まってくる子ども、手を泥だらけにして感触を楽しむ子どもなどを見ると、見て、聞いて、嗅いで、味わって、触れるという「五感」を使った体験によって、子どもの育ちを支える遊びになっていることを実感しました。

そしてもう一つは、「遊び心」「子どもの主体的な遊びを支える関わり」「まるごと体験させる大人の覚悟」という、子どもへの関わりで大切にしたい価値観が備わっていたことでした。1章の大人の関わり方に前述されていたように、①大人も思いきって遊ぶ、②子どもの目線を見逃さず大切にする、③大人として関わるべきときを大切に関わる、関わりによってその土台をつくり、子どもの育ちを支える遊び場が生まれているのだと思います。これからは、さらに地域の小さな日常生活圏、できれば子どもが歩いていける距離に、五感で感じる体験の場をたくさんつくっていけたらいいなと思っています。私も地域に生きる大人の一人として、そんな場をつくっていく担い手になりたいと思います。



●付録

プレーパークお役立ち資料集

● 書籍

■冒険応援キャンペーン事業報告書 もっともっと冒険記

(特定非営利活動法人 青少年育成支援フォーラム(JIYD) 200円)

NPO法人青少年育成支援フォーラムと日本冒険遊び場づくり協会が行ったキャンペーンの報告書。

B2版の壁新聞サイズに共感を生む広報のポイントや5団体の資金調達への冒険をまとめた1冊。

■第3回冒険遊び場全国研究集会報告書 つなぎりをつなげよう

(第3回冒険遊び場全国研究集会実行委員会 1000円)

2004年11月の第3回冒険遊び場全国研究集会の報告書。講演・ディスカッション・分科会などの報告が盛りだくさんつまっている。また、アンケート調査の集計結果や紹介記事等を収録。

■冒険遊び場と子育て支援 (日本冒険遊び場づくり協会 500円)

全国5ヶ所で開催された1日プレーパークと子育てミニメッセの成果と課題をまとめた報告書。乳児の親子や子育てサークルが冒険遊び場を活用することで得られる多くの利点が伝わる1冊。

■はじめよう！パートナーシップで冒険遊び場づくり (日本冒険遊び場づくり協会 1000円)

自治体が事業として冒険遊び場づくりに取り組むときの基礎的なノウハウや事例を紹介し、行政と住民のパートナーシップを応援するガイドブック。

■乳幼児の野外遊び力を育む～冒険遊び場と子育て支援

(野外遊びによる子育ちを推進するための調査委員会 1000円)

自治体が事業として冒険遊び場づくりに取り組むときの基礎的なノウハウや事例を紹介し、行政と住民のパートナーシップを応援するガイドブック。

■手づくり遊び場づくりデザイン ブック＆デザインカタログ (まちワーク研究会 1000円)

手づくりの遊び場の取材等をもとに、プレーリーダーと造園家、まちづくりプランナーが力を合わせてつくった本。遊び場づくりの企画から、手づくりのノウハウまでがつまっている。

■子どもはおとの育ての親 (天野秀昭著／企画編集室ゆじょんと 600円)

2001年6月～2002年7月まで、毎日新聞紙上にて掲載されていた連載記事が1冊の本となる。「子どもは自ら遊び育つ」=「遊育」を提唱し、プレーパーク、チャイルドラインの実践を通して得た子ども観が伝わる1冊。

■ヨーロッパの「プレーリーダー」～養成と支える仕組み (冒険遊び場情報室 1000円)

1999年度に実施したプレーリーダーの養成システムに関するドイツ、デンマーク、イギリスの視察調査の報告。日本の現状に対する提言にも及ぶ。

- 子どもとつくる遊び場とまちー遊び心がキーワードー** (加賀谷真由美著／萌文社 2000円)
ゆかいを楽しむ心はいっしょ。子どもと大人の遊び心をキーワードにして、自らの子育て、そして市民としての遊び場のあるまちづくりへの取り組みを生き生きとレポートする。
- 子どものための公園づくりガイドライン** ((財)公園緑地管理財団編／財務省印刷局 2500円)
平成11年度建設省で文部省との連携により作成した「子どもの多様な活動の場となる都市公園のためのガイドライン」をもとにした行政担当者、活動者の参考になる本。
- 遊び場づくりハンドブック** (大村璋子著／ぎょうせい 2000円)
冒険遊び場づくりのノウハウや遊びを広げるしかけ、安全への配慮等を、海外を含めた先進事例を織り交ぜて提示。
- 子どもの参画－コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際－**
(ロジャー・ハート著/木下勇・田中治彦・南博文監修/IPA 日本支部訳/萌文社 3200円)
子どもは社会の構成員として、大人のパートナーとしてまちづくりや様々な社会的な取り組みに主体的に参画する能力があることを考察し、具体的な方法論も提示した世界的な名著。
- 自分の責任で自由に遊ぶ** (冒険遊び場全国研究集会実行委員会 1000円)
1998年11月の第1回冒険遊び場全国研究集会の報告書。冒険遊び場とは、プレーリーダーとは、を、写真をふんだんに使って紹介。
- 三世代遊び場図鑑** (子どもの遊びと街研究会編著／風土社 1500円)
「街が僕らの遊び場だ！」1982～84年に世田谷区太子堂地域で行われた調査の成果が紹介されている。子どもの遊びの秘密がぎっしり！
- 子どもの社会力** (門脇厚司著／岩波書店 740円)
「人と人がつながる力」「社会がつくっていく力」としての「社会力」の意味と重要性を示し、子どもの成長過程で必要な大人の働きかけや、「冒険遊び場」といった地域での実践を訴える。
- 遊び場のヒミツ** (羽根木プレーパークの会編／ジャパンマシニスト社 1100円)
「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに20年を迎えた羽根木プレーパークの現世話人が多くの人に読んでもらいたいと作った本。
- ハンドブック子どものための地域づくり** (あしたの日本を創る協会編／晶文社 2000円)
子どもの自由な遊び場づくりを目指して活動する住民たちの体験と知恵から具体的に答える189項目。
- もっと自由な遊び場を** (遊びの価値と安全を考える会編／大月書店 1500円)
どりのぞかなければならぬ危険と、遊びが面白くなる危険の違いは？安全基準にふり回されている海外事情も紹介し具体的に提案。
- 冒険遊び場がやってきた！** (羽根木プレーパークの会編／晶文社 2300円)
前身である経堂の冒険遊び場から、日本初の常設の冒険遊び場羽根木プレーパークの開設の経緯、1987年までの歩みを活動者たちが自らつづった。

● ビデオ

- 子どもたちは甦るー羽根木プレーパークの遊び場づくり** (わかば社 4000円)
1980年羽根木プレーパークでの活動の様子を10ヶ月にわたって撮影し、16ミリ映画を制作。VHSビデオ版(43分)

● CD

■あつらいいな！こんな遊び場 (まちワーク研究会／冒険遊び場情報室 500円)

地域の子ども＆大人が、自分たちで夢の遊び場をデザインするためのノウハウ＆全国の手づくりの遊び場での人気の遊びや遊具のカタログを楽しくまとめた資料。

■やってみたいな！こんなおまつり (まちワーク研究会 500円)

「子どもたちが中心となって企画するおまつりができるかな？」と思っている人に絶対お役立ちの資料。

● ホームページ

■日本遊び場づくり協会 <http://www.ipa-japan.org/asobiba/>

■福岡プレーパークの会 <http://fukuoka-pp.net/>

■まえばるの遊び場ったい！ <http://www.itogura.com/news/playpark/pp.htm>

■乳幼児子育てネットワーク・ひまわり <http://hi-ma.net/>

■ふくおかに冒険遊び場をつくろう会 http://www.geocities.jp/bouken_fukuoka/

■大野城プレーパークの会 <http://npo-ccc.net/playpark/index.html>



●子育て応援 BOOK 冊子づくり委員会 メンバー紹介（執筆担当順）

● 相戸 晴子（あいと はるこ）（執筆担当：1-1、5-1、5-2）

筑紫野市在住。中1の娘と小4の双子の男児と夫の5人家族。都会に住んでいるわけでもないのに、親子揃って外遊びがあまりうまくありません。でも、この冊子づくりを通して、はじめの半歩？くらいが踏み出せたような気がします。何より私自身が生まれて初めて「ベーゴマ」を回せたことは、忘れられない思い出となりました。むきになってコマに糸を巻く私に、パパや子どもたちから「上手になったやん！」と讃められ、少々複雑な気持ちもありますが、これは私の遊び場？も兼ねているんだと思うことにして、子どもと同じ目線で楽しんでいくことにしました。たくさんの出会いと学びをありがとうございました！

● 山下 智也（やました ともなり）（執筆担当：1-2、2-5、編集担当）

山口県生まれ。九州大学大学院人間環境学府人間環境心理学研究室に所属し、現在博士後期課程に在籍中。研究テーマは「子ども参画」「大人の存在・関わり」など。子どもが遊びに没頭しているとき、子どもが何かを発見したとき、そして心から充実感を感じているとき…、そんなときに見せる子どもたちの＜活き活き感＞を追い求めています。そしてそのときの＜大人の存在＞って何だろうと思ってみたり…。ちなみにきんしゃいきやんぱすでは子どもたちに「やましーたけ（→しいたけが嫌いなので）」と呼ばれ、子どもと戯れる毎日を過ごしています。今回は途中から編集委員に加えていただき、非常に貴重な経験となりました。ありがとうございました！

● 金子 加代（かねこ かよ）（執筆担当：2-1、3-1）

飯塚市在住。養護学校に勤める夫と3人の子（小5男、小3女、年長女）と暮らしている。今回、忘れられないものがたくさんできました。その中でもベスト3は、

- 1 〔食べ物〕前原のプレーパークで見た巨大バウムクーヘン。
- 2 〔言葉〕古賀彩子さんの「土は汚くないよ。汚れても汚くないよ。」
- 3 〔気持〕おうちでプレーパークをやった時、プールをどうつくるか考えた「わくわく感」

プレーパークもパソコンも若葉マークの私を温かく受け入れてくれたみなさんに感謝します。ありがとうございました。

● 木ノ原 元美（きのはら もとみ）（執筆担当：2-2、2-8、編集担当）

飯塚市教育委員会穎田公民館地域活動指導員 福岡県立社会教育総合センター推進コーディネーター。北九州市在住。高1、中1の息子と夫の4人家族。今回、公民館活動としてプレーパークを実施しました。初めてのことでの不安いっぱいだったけれど、実施してみると、思っていた以上にたくさんの気づきがありました。プレーリーダーと子どもたちのやりとりから学ぶこと、遊びの中で築かれる人間関係（子ども同士、大人同士、大人と子ども）、子どものはじける笑顔・・福津の取材も合わせて、『地域で子育て』にプレーパークは使える！と確信しました。あまり肩に力を入れず、地域に場を設けることからはじめてみると、思わぬ広がりがありそうです。

● 古賀 彩子（こが あやこ）（執筆担当：2-3、5-3、コラム、座談会登壇者）

福岡市在住。財団法人プレースクール協会でプレーリーダー修行の後、結婚・出産・3児の母となり、気がつけばプレーリーダー・遊び場のコーディネーターとして復職。現在、福岡プレーパークの会代表。一緒に遊んで育てた子どもたちも大きくなり（中3、中1、小5）、最近では「お願ひですから勉強させて下さい！」と懇願される毎日です。遊び場に関わって20年。子どもたちが活き活きと遊べる社会になることを願ってやみません。これからも「遊び場！プレーパーク！！」を合い言葉に“遊び場応援隊”として尽力したいと思います。

● 古野 陽一（ふるの よういち）（執筆担当：2-4、座談会コーディネーター）

美しい妻と3人の子ども（4歳女、9歳男、12歳男）に囲まれ、海に程近い山の麓に住み、在宅ワークで悠々と暮らす45歳…の書き出して始まるのが私のプロフィールだったのですが、この5月から激変。週に5日も会社に行く生活になりました。（←それが普通じゃっ！）もともとこの冊子の原案を作り、いくつかの原稿と編集を担うと張り切っていたのですが、事実上ほとんど何もできず…編集委員の皆様の並々ならぬ熱意で私の抜けた穴を埋めていただきました。感謝！

● 古賀 靖紀（こが やすのり）（執筆担当：2-4）

福岡県立社会教育総合センター研修・情報室勤務。柳川市在住、49才、妻、2人の子ども（高2長女、小5次女）それと父・母の6人家族です。今回のプレーパークに関わる取材で、1960年代～1970年代の子ども時代に、冷蔵庫や洗濯機が梱包された木の箱を組み合わせて、木の上などに「秘密基地」づくりを行っていたころを思い出しました。このころ、たくさんの友だちといっしょに、大人にはれないような秘密基地の作り方を相談し合いました。この冊子でもう一度、子どもたちが、子どもだけの夢のつまつた遊びができる遊び場づくりのきっかけにしたいですね。

● 那須 きよみ（なす きよみ）（執筆担当：2-6、3-1）

前原市在住。小4、小2、4歳の男の子と夫が見守る中、現在「まえばるの遊び場みたい！」隊員、自主保育「おひさま遊ぼう会」メンバーとして糸島の自然の中を飛び回っています。プレーパークに関わって3年。今回の取材で、人のつながりと遊び心を出発点とした遊び場づくりの無限の可能性を感じることができました。遊びに没頭する子どもたちは、真剣そのものだったり、満面の笑顔だったり。自分の力を結集して遊んでいます。子どもも大人も、いっぱい遊んで大きくなれ！

● 中村 祐司（なかむら ゆうじ）（執筆担当：2-7）

現在は社会教育総合センターで社会教育主事をしているが、それまでは小学校の教員として、子どもには厳しく指導してきたと思います。しかし、我が子となるとなかなかそうはいかないと思いながら子育てしています。家庭では、もっぱら妻に厳しい役を任せて、子どもとは友だちのような関係で楽しく過ごしています。というか、最近では子どもの手下のようになって、遊んでやってるというか遊んでもらってます。遊びは多くのことを学ばせてくれます。プレーパークが、たくさん笑顔を生み、多くの学びを提供していることを、本誌の編集を通して知ることができました。

● 渡邊 福（わたなべ さき）（執筆担当：2-9、イラスト担当）

筑豊子育てネットワーク「かてて！」事務局。飯塚市在住。会社員の夫と、小5・小2の息子、幼稚園年少と1歳の娘の6人家族。今回、冊子づくりに参加するにあたり、何でわざわざ「遊び場」が必要なんだ？と思っていましたが、ある日、「公園の木に登るな！」と我が子たちを叱る祖父を見て、木登りが大好きだった私は、いつの間にか体裁と規制で整備されてしまった社会に、ハタと気づいてしまいました。「準備8割、反省2割」と言ったプレーリーダーの言葉が忘れられません。プレーパークは、たくさんの大人の愛情と手間ヒマのかかった「遊び場」です。この冊子をきっかけに、皆さんの地域でもプレーパーク現象が巻き起こることを期待しています！

● 取材協力

福岡プレーパークの会
「おうちでプレーパーク」関係者
飯塚市穎田公民館
きんしゃいきやんぱす
公立大学法人 北九州市立大学
乳幼児子育てネットワーク・ひまわり（北九州市）
「九大探検！」関係者
まえばるの遊び場つたい！（前原市）
ふくおかに冒険遊び場をつくろう会（福岡市）
わくわくプレーパーク（福津市）
大野城プレーパークの会（大野城市）
「公園プレーパーク」関係者

ご協力ありがとうございました。

[本冊子にかかわること、並びに掲載している事例についてのお問い合わせ]

ふくおかボランティア活動支援事業実行委員会

(福岡県立社会教育総合センター内)

〒811-2402 福岡県糟屋郡篠栗町大字金出 3350-2

TEL:092-947-3511 FAX:092-947-8029

e-mail: info@kosodate.pref.fukuoka.jp

<http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/syakyo/>

■ 福岡県教育文化奨学財団振興事業

■ 子育て応援BOOK 「はじめのいっぽ Vol.2」

～福岡発！地域でつくる子どもの遊び場＆プレーパーク編～

* 本誌記事の無断転載を禁じます。

■ 発行日 2006（平成18）年10月25日

■ 発 行 ボランティア活動支援事業実行委員会

■ 製 作 子育て応援BOOK冊子づくり委員会

■ 印 刷 よしみ工産株式会社

北九州市戸畠区天神1丁目13番5号 TEL(093)882-1661



子育て応援BOOK
「はじめのいっぽ Vol.2」
～ 福岡発！地域でつくる子どもの遊び場＆プレーパーク編 ～